＊特集
大学で何を学ぶか
インタビュー
もう一つのダボス
姜尚中・聖学院大学学長に訊く　1
先生、それって何の役に立つんですか？
佐々木敦　10
理系女子（リケジョ）的学び方のススメ　美馬のゆり　15
「戦争を生きた先輩たち」プロジェクト
〝生きた学びの場〟を創る　松野良一　20
＊連載
初版本、ナンセンスなフェティシズム
阿川弘之著『鮨　そのほか』酒井道夫　表2
大学出版部ニュース　25

NO. 98
2014. 4
＊春

一般社団法人
大学出版部協会

THE
ASSOCIATION
OF
JAPANESE
UNIVERSITY
PRESSES

大学出版

大学と社会を結ぶ　知のネットワーク

初版本、ナンセンスなフェティシズム

阿川弘之著『鮨 そのほか』

酒井道夫（二代目酒井九ポ堂）

本体は白地に水色（太）と朱色の縦縞による和の装い。ツツは赤の地に、黄色と水色の山がた文様。天地は黒。いずれの色も淡く、目にやさしい。この向きのまま本体をツツに入れると、コシマキの上に背文字がおさまる

著者の本を読む機会をこれまで逸してきた。というか、「戦記もの」「旅行もの」にまでは手が出せないよという勝手な思い込みがあった。脈絡の無い乱読だけを身上と心得て平気でいる、文学素人の恐ろしさだ。それが、本書（新潮社、二〇一三、装丁・新潮社装幀室）のストイックな装丁に惹かれ、この歳にして阿川弘之さんにお初にお目にかかりました。ゴメンナサイ。

天小口をアンカットに仕立てたソフトカバー製本だが、お洒落な佇まい。和風を漂わせた意匠の本体を、さらに厚手の用紙で天地にくるんで養生。いわゆる函ではない。背の抜けた四角いツツ（?）に見える。粋な姿だが、店頭では地味だ。そこが却って目立っているというか、あまたの新刊書がこれ見よがしの装いを競うなかで逆手にとった戦略か。本書を追って同様の体裁を纏う安岡章太郎著『文士の友情 吉行淳之介のことなど』（新潮社、二〇一三）も出た。シリーズ化の目論見でもあるのだろうか。

気になることが一つある。コシマキの掛け具合からだろうが、店頭で本書を手にとって吟味した客は、従来からの慣れでこれをツツに戻す。すると背と小口が入れ替わる。お分かりだろうか。本を函に戻す場合、普通は小口から差し込みますよね。ところがそれでは反対向き。コシマキの惹句が読めるように棚に戻すと、本の背が見えなくなっている！

まあそれはともかくとして、店頭での新奇な装いによる妍の競い合いはやめにして、読書人の傍に寄り添う居ずまいをこそ整えようという時代の到来か。上品な調度品を志向しているなら歓迎だ。書物の販売戦略にも転換期が訪れつつある、なんて言っては大げさか。

間を経ずして同著者の『井上成美』（新潮社、一九八六）をある古書市で発見。こちらは良き時代の造本。紺布装の上製本で立派な函入り。少し背が焼けているが一〇〇円ぽっきり。これは今こそ読むべき名著だった。軽薄な本フェチにも、姿勢を正す機会が訪れることもある。

もう一つのダボス——姜尚中・聖学院大学学長に訊く

【解説】姜尚中先生は、一九五〇年熊本県熊本市生まれ。早稲田大学大学院政治学研究科博士課程修了。旧西ドイツ、エアランゲン大学に留学の後、国際基督教大学や東京大学大学院情報学環・学際情報学府で教鞭を執られた。専攻は政治学、政治思想史。主な著書として、『マックス・ウェーバーと近代』、『オリエンタリズムの彼方へ』などの専門書があるほか、近年では、『在日』、『愛国の作法』、『悩む力』、『母』、『心の力』など、自らの出自を問いながら、アカデミズムとジャーナリズムを架橋するような著作を数多く発表されている。

姜先生は、本年四月一日付で聖学院大学学長に就任される。本インタビューでは、なぜ、あえて大学に残り、最高学府の長を引き受けたのか。また、グローバル化や情報化が進展するなかで、大学や学生はいかなる知の獲得を目指すべきかを中心に伺った。読者の皆様の参考になれば幸いである。

（聞き手・慶應義塾大学出版会・上村和馬）

二つの「ダボス」

——先生は、この四月一日付で聖学院大学の学長に就任されます。長年、アカデミズムとジャーナリズムを架橋するように活発に発言をされてきて、東大を退職されて言論人一本で行くという道もあったかと思います。それがなぜ、あえて大学に残られ、最高学府の長を引き受けられたのでしょうか。

一つは偶発的な形で、たまさか大学からご依頼をいただいたということがあります。より内的なこととしては、自分が思っていた、こうあってほしいという大学のイメージ

があり、それは自分一人で理想だけ描いても始まらないわけですが、ひょっとしたらそういうものを実現できる可能性があるんじゃないかと、そういう風に思いました。

――それは具体的にどういうイメージなのでしょうか。

私はいま、大学に必要なものは二つのダボスであると言っています。ご存知の通り、ダボスと言えば、毎年一月に開かれるダボス会議、世界経済フォーラムの開催地です。世界中から政界や財界のリーダーらがスイスのリゾート地に集い、国際競争力の国別比較報告を発表したりして、各国の大学教育のあり方もここから大きな影響を受けています。現代のダボスは、グローバリゼーションの台風の目のような場所と言えるかもしれません。

もう一つのダボスは文学の世界で、トーマス・マンの『魔の山』（一九二四年）は、ダボスのサナトリウムを舞台に書かれています。サナトリウムは結核患者の療養所ですから、ある意味、下界とは隔絶された世界です。

私が大学に入ったのは六〇年代の終わりでしたが、ちょうど大学の大衆化が一気に進んでいる時でした。それでも大学という空間は、現在のそれとはだいぶ違って、よく象牙の塔と言われてきましたが、『魔の山』のサナトリウムにも通じる、世間から隔たった場所であったと思います。『魔の山』は、主人公が療養中のいとこを見舞うところから始まります。ところが自身も結核に罹っていることがわかり、そこで有象無象の人間や思想と出会い、揉まれていく。マンはその過程をイニシエーション（秘技伝授）と語っていますが、大学もまた、やがて社会へと出ていく青年が、様々な出会いを通じて世界を知るための秘技と出会う、イニシエーションの場だと思うのです。

私は特にこの二〇年ほど、グローバリゼーションがはっきり形となって現れるなかで、大学は現代のダボスに代表される新自由主義的な思想に傾斜していった気がしています。グローバル化に対応できる、即戦力となるような人材をいかに育てるか。社会から現代のダボスであることを求められているという側面もありますが、どこに行っても右へ倣えで、もう一つのダボスを忘れているんじゃないか。そんな思いを強く持ってきました。

いま、長寿社会であると言われますが、現代の若者はいったいどこでイニシエーションを受けるのでしょうか。やはり大学にはイニシエーションを受け／施す、もう一つのダボスとしての機能が必要で、二つのバランスの上に青年は大人となり、社会に飛び立っていけるんじゃないかと思います。聖学院はそれほど規模が大きくないですから、もう一つのダボスをもう少し前面に出せるかもしれない。そんな思いを託して、依頼を引き受けました。

――グローバル化のお話がありましたが、先生が大学で教

鞭を執られて三〇年近くになられるでしょうか。めまぐるしい変化を経験されたことと思います。現在の大学や学生を取り巻く状況についてどのようにお考えですか。

大学はこの三〇年で、研究から教育、事務に至るまで幾何級数的に忙しくなってきています。先端的とされる大学は、研究のフロンティアに立つことを要請され、いまの研究体制はプロジェクト型が基本ですから、資金と人材を投入して三年なり五年なりで一つの回答、研究成果を出せという仕組みになっています。これには多くの資金やスタッフが必要になりますし、コンプライアンスが大きな課題にもなっています。

それから情報化、IT化が進み、最近ではいわゆるオープンコースウェアも増えてきています。世界に名だたる大学が講義をネット上で公開し、情報機器の端末さえ持っていれば、ほぼ誰もがアクセスできるようになっている。こうした動きはもっと広がっていくと思いますし、これまで大学教育にアクセスできていなかった人たちに門戸が開かれるなど、良い面もあると思います。

その一方で、大学に入学して、四年間在籍するとはどういうことなのか。あえて大学に身を置くことの意味も改めて問われてくるでしょう。このままでは、大学の最後の存在理由（レーゾン・デートル）は、卒業資格を与える資格授与機関というところに行き着くのではないか。そんなことで大学が生き残れるとは思えませんが、いったいそれ以外に何があるのかということも考えてしまうわけです。

実際、大学教育に対する学生の側のニーズ、何より彼らを取り囲む社会のニーズは、かなりドライで機能的なものになっています。どのような商品を大学は学生に、ひいては社会にサービスとして提供できるのか。学校と学生が、サービスのサプライヤーと受益者の関係になっているのが今日の大学の現状だと思います。

情報環境の劇的な変化

――先生は長年、マックス・ウェーバーを思索の導きの糸とされてきました。ウェーバーは『職業としての学問』のなかで、「情熱は『直感』という決定的なものを生み出す前提条件である」と述べ、知への情熱の重要性に触

れています。先生は最近の学生の知に対する渇望をどう見ていらっしゃいますか。

まず、この二〇年で情報環境が劇的に変わりました。ある種の銀河系と言えるほどの知識が無限大に、ネット上で見られるようになっています。アカデミズムの世界でも、たとえば博士論文は、遠からずウェブに全部アップしようという方向で動いています。そうしたことも含めて、今の学生は多かれ少なかれ、知るべきものはすでに目の前にあり、あとは自分が端末をどう動かしてそこにアクセスするか、それだけの話であるといった風潮のなかで育ってきているのではないでしょうか。

ところが人間の知的好奇心、探究心は、知らない、わからないという謎があって初めて刺激されるものですから、目の前にすでに答えがあると思えば、知への欲求も枯渇してしまうでしょう。私が問題だと思うのは、情報化のなかで、いわばすべてが既知数になっているかのような錯覚、未知数はないという神話が力を持っていることです。実際には、未知数は未知数としてあり、これから世界がどんな方向へ向かうのか、社会的な事象や自然現象も含めて、予測不可能なことばかりなのですが。

今の学生を私の目から見ていて、そうした未知なるものへ近づきたいという衝動が、たしかに萎えているように思う部分もあります。ただ、しっかりとうまく問題を投げかけていくと、俄然、知的好奇心にスイッチが入って目覚めるとも思うんです。それこそ大学教育の大切な本質で、知識の量というよりはスイッチを入れてあげる。それを私はイニシエーションと言っているんです。

――ウェーバーの『職業としての学問』は、ウェーバーが学問にできることをかなり限定的に捉え、大学の講堂に生き方を求めてやってくる学生に冷や水を浴びせたのだという解釈もあります。その辺り、現在の大学教育の役割と絡め、どうお考えでしょうか。

難しい問題ですね。ただウェーバーは、学問と価値という形で問題を立て、それについて議論するよう推奨していました。私は大学の教養課程は、価値や生き方について、宗教的な命題も含め存分に議論し、探究する場所だと考えています。ハーバードでのマイケル・サンデルの講義が日本でも大きな話題を呼びましたが、アメリカの大学の良い点は、かなり青臭い議論をやるわけです。自由とは何か、平等とは何かなど、狭いかもしれないけれども、政治哲学や倫理学に類する議論をしっかりやる。しかし日本の場合、空理空論は役に立たない、大正デモクラシーのような教養主義は駄目だという姿勢が非常に根強くあります。教養、教養課程というものが漠としていて、なかなかそれが社会的に浸透しないんですね。

――先生は教養をどう定義されますか？

教養とは、自分を知って他者を知ることだと思っています。古典を知っているとか、語学ができるといったことではありません。自分の強さと弱さを知る。それは他者の強さと弱さを知ることでもあり、そこから人間としての共感も生まれていくでしょう。こうしたことを様々な古典的な叡智も含めて学び、議論をする。最近、医学部などで研究データの改ざん問題や倫理規定違反が多発していますが、教養が軽視され、非常に末梢的なところで専門課程に入っていく大学教育の一つの帰結のように思えます。そもそもなぜ、何のためにという議論をしないことのツケが回っているんじゃないかと、そんな気がしてなりません。

――知の分化、断片化が進み、人間がどう生きたらいいのか、何を信じればいいのかという意味問題がますます非合理な決断に押し込められていく点について先生はウェーバーに即して、「唯脳論的な世界」とおっしゃっていますね。

たとえば国際関係論を論じる場合に、アメリカでは必読文献に対象となる国の文学的な古典が挙がることは珍しくありません。内部の権力関係がどうなっていて、外交はどうあるべきかといった議論をするとき、どんな文学が読まれているかを知ることは、国民感情やリテラシー、ひいては国や社会に対する理解へとつながります。ところが同じことを日本でやると、文学的な話は「向こう」でやってほしいとなる。どんな文学が読まれるかということは、インテリジェンスとしてすらきちんと取り組まれていません。

文学の話は一つの例ですが、狭い学会やサークルのなかに封じ込められた言説が学問のパラダイムとなってしまう状況は、あらゆる専門分野が抱える共通の課題だと思います。「学際的」という言葉はあまり使いたくないのですが、

改訂版
パースの思想
―記号論と認知言語学―
有馬道子
人間存在そのものを問う「意味の思想」の全体像
A5判 本体4000円

アメリカ 新金融資本主義の成立と危機
石崎昭彦
歴史に立ち返って現代アメリカ経済の展開を示す
A5判 本体9000円

フランス 植民地主義と歴史認識
平野千果子
現在進行形の問題としての「植民地認識」
四六判 本体3500円

岩波現代全書
中国医学と日本漢方
―医学思想の立場から―
舘野正美
古代中国医学と日本漢方から現代医療を問い直す
四六判 本体2300円

江戸の化物
草双紙の人気者たち
アダム・カバット
お江戸の人気キャラクター化物たちの魅力とは？
四六判 本体2400円

岩波書店
東京・千代田・一ツ橋
（定価は表示価格＋税）
http://www.iwanami.co.jp/

全体として視野狭窄に陥っていることは間違いなくて、おそらく根本的なところで、現実というものを学問的に構成していく際の方法論が問われているのではないでしょうか。

私たちはどのような知を獲得すべきか

――先生は知のあり方の一つの方向性として、レヴィ＝ストロースが唱えた「ブリコラージュ」の知に言及されています。これについて少しお話いただけますか。

いま一部の大学は、時代の最前線を競い合って、グローバル30のようなある種の大学のランク付けもあります。私は先端的な研究はたしかに重要だと思います。ただそういう類いの要請だけではなくて、もう一つあるだろうと。より大きく、より速く、より強く、より高く、といった価値で表される研究とは、方向性も、質そのものも全く異なる知のあり方。かつてE・F・シューマッハーが「中間技術」という言い方をしましたが、もう一つ求められているのは、よりローカルで、地域社会、地域経済にマッチした小規模のテクノロジーや科学的知見だろうと思います。

レヴィ＝ストロースは、先端的な科学にも比肩しうる未開社会の知のあり方を「ブリコラージュ」として引き出したわけですが、今こそ見直されるべきものだと思います。地域に根づいた在来型の知見や技術を、人文・社会科学、自然科学も含めて、もう少し科学的なものに転換していく。あえて言えば、赤坂憲雄さんが立ち上げた東北学は、民俗学をベースとしたブリコラージュ的な知だと思います。

大学教育も、ごく一部の先端的な大学をモデルに、その縮小再生産をやればいいというわけではない。これからの大学はもっと独自性を持つべきだと思います。私が勤務する聖学院大学も、地元の上尾市やさいたま市、大宮、埼玉県などと関係を深め、地域との関わりのなかで人材を養成しようとしています。卒業後に福祉や教育など、地域社会の現場で働く学生が多いこともあり、私は現場の力と教養の力ということをよく口にしています。東日本大震災は実に象徴的だったと思いますが、日々刻々と変化する現場で力を発揮するのは、マニュアル化された知識でなく、その場のあり合わせでうまく問題を解決する知恵で、それこそがブリコラージュだと思うんです。「器用仕事」と訳されていますが、学生にはまず、教養を通じて自ら思考する力を養い、そこからブリコラージュ的な現場感覚を身につけてほしいと願っています。

――ブリコラージュとの関わりで、先生は「土発的な知」にも言及されています。また「総合力」「総合知」についても盛んに言及されていますが、どのような問題意識の下にそれを強調されているのでしょうか。

まず、土発的な知についてですが、日本には私たちが考

えつかないような、すぐれた在来的な技術や資源がたくさん眠っています。ただ、それを学問的な形に置き換えることがまだあまりできていなくて、そこで必要となるのが翻訳能力だと思うんです。様々に可能性を秘めた在来の技術や資源、知恵を、学術的な言語に翻訳していく。こうしたプロセスや、在来的なものと学問が融合して生み出される知を「土発的な知」と呼んでいます。

それから私が「総合知」と繰り返すのは、なぜそれをやるのかというモティベーションに関わっています。この研究、この仕事をするのはなぜか、そこにはどんな価値の裏づけがあるのか。どんな先端的な研究や高度な専門知も、そこにモティベーションがなければ結局、意味をなさなくなってしまいます。そしてそのモティベーションをどこかで支えるのが、人文・社会科学、自然科学的な知見も含め、教養のなかで培われてきた哲学や倫理、もしくは宗教であると思います。何のために生きるのか、あるいは生の根本的な価値とは何なのか。様々な学問、教養をベースとして踏まえながら、そのような根本的な議論をするなかから、はじめて総合知というものが出てくるわけです。

私はこれからの五年から一〇年で、日本の社会はさらに大きく変化して、おそらく転職が常態化していくと考えています。大学を卒業しても、終身雇用はいよいよ望めなくなってくる。ただ、転職を繰り返していくとき、そこに絶えず自分がイノベートできるものやモティベーションを見出せないと、相当苦しくなりますね。また、そういう若者が増えていくと、社会そのものも行き詰まってしまいます。そこでモティベーションの源泉は何かを考えていくと、やはりそこには教養があり、生の根本的な価値を問う、教養を土台とした総合知が求められると思うのです。

大学ならではの「財産」

――ふたたびウェーバーに戻りますが、『職業としての学問』では、諸々の対立する価値がせめぎ合うことを「神々の闘争」と表現しています。「神々の闘争」のなかで、

新刊案内

伊藤セツ著
クラーラ・ツェトキーン――ジェンダー平等と反戦の生涯
菊判・一〇七〇頁・本体一五〇〇〇円
没後八〇年、ツェトキーンの思想と運動の全軌跡を克明に著し、「歴史」における「個人」の役割を考える著者五〇年の研究集成。

米村健司著
アイヌ・言葉・生命――西田幾多郎と廣松渉の地平から
菊判・一〇七二頁・本体一二〇〇〇円
西田と廣松の哲学を視座として、自然、生命、近代を根柢から捉え直し、アイヌ民族の記憶と歴史を考えていく。

長田華子著
バングラデシュの工業化とジェンダー――日系縫製企業の国際移転
A5判・三四〇頁・本体七六〇〇円
中国からバングラデシュへの工場・技術移転をジェンダーの視点から分析し、日系企業の国際移転の特徴と課題に迫る。

寺林伸明・劉含発・白木沢旭児編
日中両国から見た「満洲開拓」――体験・記憶・証言
A5判・六二〇頁・本体九四〇〇円
「開拓」の名の下に中国東北で何が起きていたのか。日中両国の研究者および「満洲開拓」体験者の手による「開拓」の実証研究。

御茶の水書房
〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751
http://www.ochanomizushobo.co.jp/

自由の苦悩に耐えつつ、自らに固有の価値や倫理＝デーモンを見出せということかと思うのですが、この価値や倫理を学生に限らず私たちはどのように見出していけばよいとお考えですか。

大学で学問を学ぶなかで何が一番大事かというと、それはいろいろな洗礼を受けることだと思うんです。こういう考え方、ものの見方があるのかということへの見聞を広め、その考え方の根っこにある価値観に触れていく。

経済学を例に考えると、アダム・スミスが一八世紀に「ホモ・エコノミカス」（経済人）と言ったとき、スミスの時代であれば同時に道徳感情論が教えられていた。つまり単なる経済学ではありませんでした。二一世紀に入って金融工学が注目を集めましたが、一方ではそれが現実に破綻をきたし、経済学を狭い幅で捉えることへの疑問とともに、経済や経済学をめぐる倫理やモラルの問題が改めて見直されているように思います。

よく知られた経済学の潮流に、ケインジアン的な、公共領域を強くしようという見方と、フリードマンやハイエクのような自由競争を重んじる見方が大きく二つあります。前者は、可能な限り完全雇用を実現し、不況を克服するのが経済学の役割であり、国はそのために必要な政策を講じていく。市民の最低限の生活が保障され、社会的格差が是正されることで階級間の融和や社会的安定が実現されるのだと。それに対して後者は、重要なのは個人、最も尊重されるべきは個人の思想や行為の自由で、経済活動は市場のメカニズムに委ねるべきである。財の配分は努力や功績によって決まるもので、そこから創造的なものが生まれ、経済成長や繁栄がもたらされるのだと考えます。

このような場合、どちらがより学問として正しいのか、正当性があるのかを判定するのは容易ではありません。ウェーバーの「神々の闘争」とは、おそらくそのような問題をどう受け止め、自らが最終的にいかなる選択をするのかということも含めて言っていると思うんです。

どちらにしても、それぞれの主張や考えの根幹には、人間や社会をどう見るかという価値があり、それは最終的に、学問的な探究を通じた果てに、最後に自分が出てくるものだと私は考えています。知見の対立に根本的なものがあれば、それぞれの考えは狭い意味での学問から演繹されるのではなく、教養を土台としたそもそも論、生の根本的な価値とは何か、人間や社会をどう捉えるかを問う哲学のなかで戦わされており、ウェーバーはその部分の重要性を言いたかったのだと思います。そのなかから、最後のデーモン

を選べるのだと。

――ここまで、学生の本分は学問にあるという前提でお話を伺ってきましたが、学生は知を獲得する以外に、大学生活で学ぶべきことがたくさんあると思います。その点についてはいかがでしょうか。

学生は学費を払うことで時間と空間を買う。四年間という時間、居場所を得るということだろうと思います。そこで大きな鍵を握るのは、いろいろな人間や未知の世界との出会いでしょう。ここで自分のモデルになり得る人と出会ったり、計算づくではない人間関係を築いていく。これは大学ならではの独特のもので、貴重な財産だと思います。また、そういう出会いが可能な環境を作り上げるのが大学の役目でもあるでしょう。大学がイニシエーションの場であるというとき、友との出会い、師と仰げる人との出会い、そういうことを含めてのイニシエーションなんですね。

――最後に、大学で学ぶ学生、また大学教育に携わるすべての人たちに向けてメッセージをお願いします。

繰り返しになりますが、大学とは、知的なイニシエーションを受け／授ける場所であり、そこで初めて知るということに目覚める、こんなものの見方や考え方があるのかと衝撃を受ける、そういう場所だと思うんです。知ることに目覚め、新たな世界の見方を獲得しながら、学生はもう一人の自分、今まで知らなかった自分を見出すことになるのではないか。そのときその人は、全く新しいステージに自分の身を置いているのだと思います。自分の知らない自分を見出すことで世界はまた違った形で見えてくるでしょう。ですから大学に携わる人たちは、大学とは未来ある若者たちを預かる場所であることを常に意識して研究や教育に従事するべきだろうと、そんなことを思っています。

初公開を含む300点強を収録
写真集 9000円 『内容案内』送呈
尾張徳川家の幕末維新
徳川林政史研究所所蔵写真

徳川義崇監修・徳川林政史研究所編
撮影・徳川慶勝。今よみがえる、幕末の動乱と近代化する日本の姿！

明治・大正・昭和の政治・人物・事件を知る、貴重な写真資料集を復刊！
画譜 憲政五十年史
田中萬逸編 1939年、憲法発布後50年を記念して編集された写真資料集。約2000枚の写真で構成。
42000円 『内容案内』送呈

南光坊天海発給文書集
東叡山寛永寺監修 18000円
宇高良哲・中川仁喜編 江戸幕府初期の宗教政策に深く関与した天海の発給文書388通をすべて翻刻し、写真も可能な限り集成する。

永青文庫叢書 細川家文書
故実・武芸編 【全5冊完結】
熊本大学文学部附属永青文庫研究センター編 22000円
大名家の体面や格式、儀式行事のために必須の知識として蓄積された故実資料132点をカラーで収載。

事典 日本の仏教
蓑輪顕量編 教義・思想を中心に、日本の仏教を平易に読み解くコンパクトな仏教事典！ 4200円

事典 江戸の暮らしの考古学 古泉 弘編
地中に埋もれた江戸っ子の生活が甦る。付録も充実！ 3800円

吉川弘文館
〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151／価格は税別
PR誌『本郷』定期購読受付中

■特集・大学で何を学ぶか

先生、それって何の役に立つんですか？

佐々木敦（批評家、早稲田大学文学学術院教授）

幾つかの大学であれこれ教えるようになってからかれこれ十年以上になるが、時々、というか、しばしば、と言ってもいいのかもしれないが、いささか、というか、かなり、悩ましいのは、まず一言で言ってみるならば、有用性の問題である。

私はもともとフリーランスの物書きであり、それも芸術とか文化とか呼ばれる分野において複数のジャンルにまたがって仕事をしてきた。したがって大学での講義もあれこれ多岐に渡っているわけなのだが、総じて言えることは、それらはいずれも、普通の意味では特に何かの役には立ちそうにない、というか立たない、いわばあってもなくてもいいような類いのことだ、ということである。

こう書くと、いささか、というか、かなり、自虐的なようだが、私はそもそも、芸術や文化と呼ばれている営み自体、大袈裟に言えば人類にとって、あってもなくてもいいものなのだ、と考えている節がある。そして、あってもなくてもいいのに何故だかある、ということにこそ、それらの価値とか存在意義とか呼び得る何かが宿っている、そのように思っているのである。しかし、このことをわかっていないしわかる必要も感じていない学生たちにわかってもらおうとすることは、実にむつかしい。有用性の無さの有用性を理解させることは、大変に困難なことなのだ。

これは逆説でも詭弁でもない。私は別に、役に立たないこと、立ちそうにもないことにこそ意味がある、などと言いたいわけでもない。また、一見すると役に立ちそうもないことだって役に立つことがあったりするのだ、などと主張したいのでさえない。ただ、有用性と教養（この言葉にも問題なしとは言わないが）とは別ものであり、役に立たなさそうなこと、いや、はっきりと役に立たないであろうことでさえ、学ぶ意味はなくはない、いや、あるのだと、

私からしたらごく当然と思えることを言っておきたいだけである。

繰り返すが、役に立たないなどと誰が決めたのか、立つかもしれないじゃないか、という物言いと、これは違う。そうではなくて、私が言いたいのは、要するに、役に立つとか立たないとかはそりゃまあるだろうが、それは大学と呼ばれる場所のありようとは本当は全然関係がない、と言ってしまいたいのだと思う。だがしかし、これが（さほど極論であるとは思っていないのだが）なかなかわかられず、そしてますますわかられなくなっている、ということなのである。

先生、それって何の役に立つんですか？　こう真正面から問われたことがあったかどうか記憶がはっきりしないが、しかし問われたも同然な感じになったことは確かにある。そしてこの身も蓋もない問いに対するさしあたりの答えは、たぶん役には立たない、というものである。しかしそれでは話が終わってしまう。そもそも、私が講じているようなことは、いや、私がやってきて、これからもやっていくだろうことは、おしなべて無用な事どもであり、しかし自分は他でもないそれらによって（この「によって」こそがポイントなのだろうが）生きてきたのだということを、この私自身が誰よりもよくわかっている。

ならばいっそ自分のようになればいいのだ、と返せばいいのかといえば、それはいくらなんでも無責任だとも思う。だから結局、ちょっと嘘をつくみたいな感じにしかならない。つまり、いやいやもしかしたら役に立つかもしれないよ、という理屈を捻り出したりするわけである。そのつもりになれば、有用性なんて幾らでもでっち上げられる。そもそもが有用だと思われていることの大方だって、ほんとうは特に役になど立たないというのが真実であり、ただ役立つふりをするのが上手だったり、そういう錯覚が長年の間に常識に近いところにまで至っているというだけかもしれないのだから。しかしそうして「それって何の役に立つんですか？」をかわした後で、やはりどこか後ろめたいような、残念なような、負けたような心持ちになってしまったりもするのである。

私が大学で教えるようになったのは、いわゆる「ゼロ年代」の始めあたりからだが、その頃、学生によく言っていたのは、かつては情報や知識をどれだけ貯め込んでいるかが人を選別した。そういう時代があった。物知りとかオタクとか知識人などと呼ばれる存在は、基本的にはそうした人々であった。それは、情報や知識の獲得と蓄積に、色んな意味でコストがかかりまくったからである。主として経済的、そして時間的に、他人以上にコストを掛けられた者だけがアクセス出来る、いわば埋蔵された／秘匿された知識／情報があった。

だがしかし、言うまでもなく、インターネットの登場とその全面化によって、そうした優越性は著しく後退した。

ひとより速く、ひとよりレアな知識／情報を、ひとより大量にストックする、ということで（それがどんなゲームにせよ）勝てる時代は、はっきり言ってもう終わった。ネットがあるのだから、それを敢て使わないなどという選択肢はない。使えるものは、なんでも使えばいい。だからいうなれば、これからは記憶が脳外にあるようなものである。必要に応じてネットにアクセスして検索すればいい。わざわざ「私」の内に貯めておかなくても、必要な情報や知識は、常にそこに、どこかにある。

こういう言い方をすると、インターネットを過信妄信し過ぎだ、という意見があるだろうことはむろんわかっている。もちろんネットは全てではない。あるわけがない。むしろネットが「全て」という幻想を可視化することにこそ問題はある（ということを、私は以前『未知との遭遇』という本に書いた。いま書いていることも同書の主張の展開である）。しかし言いたいのはそういうことではなくて、ネットによって個人のさまざまなコスト負担が軽減したのは良いことであり、それはつまりコストを掛ければいいわけではないという実は当たり前のことがやっと自明になったということでもあり、そしてもっとも重要なことは、だからこそ、これからは本当の意味でのアタマの良さがはかられる、ということなのだった。馬鹿みたいな言い方をすれば、知っている、ということの優位性が低下したおかげで、いつもその下に押し込められていた、わかっている、ということの意義がやっと顔を出してきたのである。

ネットにアクセスすることも、検索エンジンを使うことも、誰にだって出来る。だから問題はその後だ。以前とは比較にならないほど簡単に得ることが可能になった膨大な知識や情報を、では君はどう使うのか、そしてそれらから、君は一体何を考え出せるのか。そもそももともと重要なことはこちらであった筈である。だから君たちよ、ネットによってラクになったと思ったら大間違いだ。むしろ今後の方がずっとシビアなのだ。

と、まあこんなことを口走ってみてから、はや十余年。その後どうなったかというと、実のところは、どういうわけだか、あまり昔と状況は変わっていないような気もする。むしろ何と言うか、私が言ったようなこと以前に、ネットを酷使する気にな（れ）るかどうか、そして実際に酷使出来るかどうか、いや酷使とまでは言わないまでも、ネットを適当に上手に使えるかどうか、考えてみれば、その行為自体にもコストはかかるわけで、そこで既にして分かれ目が生じてしまっている、という気がする。果たしてネットの後にやってくる筈だったアタマの良さは、どこに行ってしまったのか。

検索エンジンは、瞬時に結果を表示する。優先順位は勝手に上から並べられている。ウィキペディアには大体、それについての確からしいことが書かれてある。私は、そういうことを上手く処理することをアタマの良さと呼んだわ

けではなかったのだが、そこで留まってしまうことも可能だし、それで済んでしまえることも、ままあったりするのもおそらくは事実だ。それに、ネットによって、その存在が触知される情報や知識はあまりにも膨大なので、本気でやっていたらマジでキリがない、と思ってしまう。適度なところで切り上げて必要なヴォリュームに収め、あとは間違ったことさえ書かなければ大丈夫。こう書くと、それはお前の学生の出来が悪いだけだ、とお叱りを受けそうだが、しかしこういう次元でさえも、もちろん出来不出来はある。それは多くの場合、さしあたり有用な知識／情報と、そうではないものを腑分けする作業の優劣になりがちであり、当然ながら、そこにもスマートさの相対評価は歴然と出てくるわけなのである。

だから、これは今は要らない（もしかしたら、ずっと要らない）という判断を、如何に素早く、かつあやまたずに下せるか、ということが、今や、もしかしたら最重要な能力（の一つ）になっていると言えなくもない。言いかえればそれは、何かを「役に立たない」と認定する能力のことである。そして、こうしたネット時代のありさまに加えて、こと日本の場合は、長く長く続く不況不景気ゆえの、最早漠たるなどとは到底言えない、ごくはっきりとした将来不安という要素が重ねられる。役に立たないことをやっている余裕だか意志だかがあるとかないとか以前に、あれは、それは、これは、役に立たない（から要らない）と名指すことに積極的な意義があるかのようになってしまった。

だから「先生、それって何の役に立つんですか？」と思わず訊いてしまうような学生は、何も悪くはない。しかし、だったらば、どうしたらいいのであろうか。なにしろ私には、最初にも述べたように、自分が教えられることは役に立たないという自覚が、敢て言うならば一種の自信さえも、紛れもなくあるのだ。

どうしたらいいのか。この自問に対する解答は、今のところは、見つかっていない。と書くと如何にも救いがないようだし、どうも愚痴っぽくなってしまっていけないが、

ノモンハン1939
第二次世界大戦の知られざる始点
ゴールドマン　単なる国境紛争ではない。膨大な資料で捉え直す世界史のなかのノモンハン。
山岡由美訳 麻田雅文解説 ¥3800

ソヴィエト文明の基礎
シニャフスキー　かくも生き生きとソヴィエト国家の実態を描いた本があったか。文学的＝精神史的考察。沼野充義他訳 ¥5800

大正デモクラシー期の政治と社会
松尾尊兊　米騒動、治安維持法制定、普選運動、政党内閣の出現と混迷まで単著未収の16論文精選。図書館・研究者必携。¥20000

アーレント＝ブリュッヒャー往復書簡 1936–1968
パリ亡命時からアイヒマン事件後まで時代と事件と人々を背景に、最愛の人と交わした思想的対話の全容。大島・初見訳 ¥8500

共通文化にむけて
文化研究 I［全2巻］
ウィリアムズ　戦後英国最大の文化思想家の全貌を示す日本独自編集版。I はすべて初邦訳の文化論 17 篇。川端康雄編訳 ¥5800

20世紀ユダヤ思想家 3
来るべきものの証人たち［完結］
ブーレッツ　哲学と宗教の知的葛藤をたどった全巻完結。3 はレオ・シュトラウス、ヨナス、レヴィナス。合田正人他訳 ¥8000

シモーヌ・ヴェイユ選集 III
後期論集：霊性・文明論［完結］
神と必然、労働……最晩年の漂泊の日々に綴られ、その思想の核を示す精選の 14 篇に、断章と覚書を付す。冨原眞弓訳 ¥5600

東京文京本郷5丁目32－21 みすず書房
tel. 3814-0131 fax 3818-6435（税別）
http://www.msz.co.jp

ともあれ私が思うことは、今後は出来る限り、ありもしない有用性をでっち上げたり妙に取り繕うような真似はしないようにしていこう、ということである。役に立つか立たないかという選別とは無関係な場処を、どうにかして切り拓くこと。そこから広がる光景を、学生たち、若者たちに、半ば無理矢理にでも見せていこうとすることが、教育の現場で自分に出来ること、するべきことだと思うからだ。

有用性に反論したり挑戦するのではなく、敢然と背を向けること。有用性をスルーすること。「先生、それって何の役に立つんですか?」と問われたら、笑ってやり過ごすこと。そして私は私が面白いと思うこと、驚きを感じること、思考を刺激されること、世界の豊かさとかけがえのなさを感じさせてくれることを、それらをまだ知らない者たちに向かって、どうにかして語っていこうと思う。それは、そうするしかないから、なのかもしれないが、それでも希望や展望が全然ないわけではない。

繰り返すが、役に立つか立たないかが、過去にも増して重要案件になってきてしまったかに思われるのは、いわば歴史的な必然（?）であり、仕方がないというか、無理もないことである。そして私は、このことを十二分に認めた上で、しかし自分は、有用性の判断とは切り離された言説を提示していきたい。もちろん、向こうから勝手に「役に立たない」と宣告されてしまったりもするのだが、それならばそれでよい。なんなら自ら進んで無用を認めよう。だが、これは芸術とか文化とかにカテゴライズされることに限らず、おしなべて学問（この言葉にも問題なしとは言わないが）というものは、本来的には、まず第一に頭脳と感覚の快楽（という言葉も一通りの意味ではないのだが）のためにこそあるのであって、それらを使って何がやれるか、などということは、あくまでも、その後に出てくる問題の筈である。そう私は思っている。

どうして世界には、こうも歴然と「役に立たない」ようなモノやコトが溢れかえっているのか。それらは何故に創造され産出されているのか。これこそが謎であり、神秘であり、奇跡のような事実である。私は教壇から、たまたま自分が知り得た、そんな謎や神秘や奇跡のようなモノやコトを、彼ら彼女らに向けて、これからも思い切って放っていきたい。それはほとんど、投げつけていきたい、という気分だと言ってもいい。時には思いがけず、投げ返されたりすることだってあるかもしれない。

■特集・大学で何を学ぶか

理系女子的学び方のススメ

美馬のゆり（公立はこだて未来大学教授）

得意なことは？

あなたが得意なことは何ですか。それはどうやって学びましたか。

たとえば、英語、水泳、機械の修理など、そもそも得意だということは、他の人よりいろいろなことを知っていて、他の人よりうまくできる、その事柄についてはもっと奥があって、もっと学びたいと思っている。すなわち、得意だということは、学習が成功したということです。

「得意だ」すなわち「成功した学び」の特徴は、

・一定以上の時間をかける
・自分から学びたいという強い動機づけを持つ
・自分から積極的に関連情報を収集し、必要なことを覚える
・教え合ったり、議論をしたりする仲間がいる
・自分より少しできる人、相当できる人、プロ、様々なレベルの先輩がいる
・自分で試行錯誤し、失敗や成功の経験を繰り返して、自分なりの知識を作り上げる
・学んできた結果がさらに学びたいという意欲を引き起こし、次の学びに結びつく

ということがあるということです。

悲しいかな、このことはすべてのことついて上手くはいかず、興味のある対象は、個人によって、限られたものだということ。でも、学習科学の研究成果を見てみると、成功した学習の特徴からわかることを、自分が苦手だと思うことにも活かしていく方法はありそうです。

学校に通うということ

日本の高校生や大学生には、何のために勉強するのかわ

からない、すぐに役に立たないのだったら、あるいは将来役に立ちそうにないから、無理に勉強することはない、という人たちが多くいます。

でもそんな人たちも幼児のころは、見るもの聞くもの、自分を取り巻く世界のいろいろなものに好奇心を持って、積極的に知ろう、学ぼうとしていたに違いありません。ほとんどの人がそのような時期を経て現在に至っています。それがなぜか、いつのころからか、学ぶことが苦しくなってしまっています。なかば義務と思い学校に通っている姿は、とてもつらそうに見えます。

一方で、江戸時代の寺子屋の絵（たとえば渡辺崋山「一掃百態図」文政元年（一八一八））を見ると、そこにはとても楽しそうに学んでいる子どもたちの姿があります。勉強しているというよりは、遊んでいるようにも見えます。寺子屋は、江戸時代の庶民の子どもを対象とした初等教育機関です。基本は自学自習。いわゆる読み、書き、そろばんを個人の興味や必要に応じて学びます。

寺子屋にやってくる時間はみんなバラバラ。それぞれ家の手伝いがあるので、それがひと段落してからという子もいたようです。みんな学びたくてやってくる。文字が読めるようになると、いろいろな物語や算術の本を読むことができる。するとそこには、いままで知らなかった世界が広がっている。そういった世界の入り口として、文字の読み書きをおぼえ、やさしい本からはじまり、難しいものへと挑戦していく。知る喜びのために学ぶということがあったに違いありません。

世界的潮流ＭＯＯＣ

近年米国の大学を中心に始まったＭＯＯＣ（Massive Open Online Courses）が世界的に注目されています。有名大学、有名教授による講義をオープンオンライン講座として公開しています。多いもので世界中から二〇万人が受講し、修了者は修了証を得ることができる教育サービスとなっています。参加大学、学習者ともに世界規模で急増しています。

大学を卒業していなくても、特定講座の修了証があれば、採用するという企業まで出てきました。大学だけでなく、企業が持つ知識を提供する講座もあります。企業はそれを、採用やマーケティングに活用するのです。

現在これらの講座のほとんどが英語で実施されているので、日本人にとってはハードルが高いと思われており、さほど参加者は増えていないようにみえます。しかし近い将来、言葉の問題がなくなっていけば、ＭＯＯＣを利用することで、大学に行かなくて済むのでしょうか。特定の大学に入学しなくても受講でき、就職できるとなれば、大学という教育機関はなくなっていくのでしょうか。

リアル書店とオンライン書店

この問題、書店で本を買うのか、ネットで買うのかということに似ています。書店に行けば、あらかじめ買おうと思っていた本だけでなく、そのまわりにある本が目に入ってきます。また、そこにたどりつくまでに、あるいはレジに行くまでに、好きなコーナーだけでなく、通りがかりのコーナーや、人だかりがあるところに、なんだろうと思って、ふと立ち寄るかもしれません。そのような寄り道を、リアル書店は可能にします。寄り道はときとして、予想していなかった新しい世界への扉を開いてくれます。

寺子屋では、そこに通ってくる仲間がいて、励まし合ったり、勉強以外でもいろいろな話をしたり、遊んだりすることもあったでしょう。協力して何かを一緒にすることもあったかもしれません。MOOCのようなオンラインの世界では、こういった活動の質も量も変わってきます。このリアルとオンラインの問題は、「大学で何を学ぶか」「大学でどう学ぶか」に深く関わっています。

「学び」の特性

実はこの問題は、学びの特性の観点からも、とても重要なことなのです。近年認知心理学における学習に関する研究から、「学習の共同性」と、「学習の社会性」が指摘されています。

学習の共同性とは、二人以上の人間が協調的に活動することによって理解が深化するという学習の特性です。一方、学習の社会性とは、学習は社会的に意味のある活動の中で動機づけられるという学習の特性です。

これらの特性を生かすことを、リアルな大学の学習環境は可能にしています。近年多くの大学で行われるようになっているプロジェクト学習（Project Based Learning）では、地域社会の課題を取り上げ、仲間と一緒にチームで解決していくものがあります。これはまさに、学習の共同性と社会性を活かした学習方法です。通常の教室で行われる授業と異なるのは、知識を伝達するような一方通行の講義

藤原書店

震災考 2011.3～2014.2
赤坂憲雄 復興構想会議委員、「ふくしま会議」代表理事等を担いつつ、変転する状況の中で「自治と自立」の道を模索してきた三年間の足跡。草の根の力で未来を創造。 2800円

「大和魂（やまとごころ）」の再発見
日本と東アジアの共生
上田正昭『源氏物語』初見の「大和魂」とは、日本人の教養や判断力である。日本古代史の碩学の評論。 2800円

叢書『アナール 1929-2010』
歴史の対象と方法 （全5巻）
ル＝ロワ＝ラデュリ他監修 浜名優美＝監訳
Ⅲ *1958-1968* A・ビュルギエール編
F・ブローデル／E・ホブズボームほか 8800円

岡田英弘著作集 3（全8巻）
日本とは何か
世界史家でこそ描きえた、日本誕生の実像。〈月報〉菅野裕臣／日下公人／西尾幹二ほか 忽ち2刷！ 4800円

セレクション **竹内敏晴の「からだと思想」**（全4巻）
第2巻 「したくない」という自由
第3巻 「出会う」ことと「生きる」こと
〈推薦〉鷲田清一／内田樹ほか 各3300円

◉「生の自律」の可能性を探る！
学芸総合誌 季刊 **環** 歴史 環境 文明
vol.56 2014年冬号
〈特集〉**医療大革命**
金澤一郎／山田真／葛西龍樹／高岡英夫／夏井睦／三砂ちづる／井伊雅子ほか
〈小特集 東日本大震災から三年〉宮脇昭／赤坂憲雄＋山田國廣（インタビュー）E・トッド
〈小特集 沖縄はなぜ日本から独立しなければならないか〉大田昌秀／新川明／三木健／海勢頭豊ほか（対談）川勝平太＋中西進〈寄稿〉木下晋ほか 3600円

月刊 **機** B6変32頁 2月号 No.263
赤坂憲雄／鷲田清一／上田正昭／中村桂子／三砂ちづる／山田鋭夫／内田純一／桑原史成／加藤晴久／尾形明子／山崎陽子／一海知義ほか
年間購読料2000円（送料込） ◎見本誌・ブックガイド呈 ＊表示価格税抜
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523
振替 00160-4-17013 TEL03-5272-0301
ホームページ http://www.fujiwara-shoten.co.jp/

ではなく、参加者が共同して何かを学び合ったり、作り上げたりする活動が含まれていることです。

共同的メタ認知

学習したことが別の文脈でも適用可能となる「学習の転移」を引き起こすとされる「メタ認知」に関する研究も注目に値します。メタ認知とは、思考について思考する能力であり、問題解決者としての自分に意識的に気づく能力のことです。自分の心的過程をモニタリング（予想、点検、評価）して、コントロール（目標設定、計画修正）する能力です。

複数の人と共同的に活動する中で、個人個人の進捗状況を共有し、目的に照らし合わせ、いま自分が何をすべきか、チームが何をすべきかが見えてきます。この状況で起こっていることは、「共同的メタ認知」と呼ばれています。自分たちの状況、過程を互いにモニタリング（予想、点検、評価）して、コントロール（目標設定、計画修正）することが、言葉や行動という相手に見える形となって現れ、結果として、問題解決が進むのです。共同的に活動することは、個人的な活動に比べ、理解がより深まり、学びが促進されます。

学び方を学ぶ

大学で学ぶことは、特定の知識だけではありません。変化の激しい二一世紀の社会においては、知識はすぐに古くなってしまう可能性があります。それでは何を学べばよいのでしょうか。

それは「学び方を学ぶ」（learning how to learn）ということです。どのような学び方があっているかは、学習する対象や課題によって異なります。個人によっても得意、不得意があるでしょう。大学では、多種多様なものを学ぶ経験を積む。この経験は、社会に出てからも、あるいは生活の場面でも、新たな課題が出てきたときに適切な学習方法を選択できる可能性を広げます。

教育学者であるデビッド・パーキンス氏は「デザインとしての知識」（knowledge as design）の必要性を強調しています。「情報としての知識」（knowledge as information）に対するものとして説明しています。デザインとは、目的にあわせて形作ること。すなわち、固定化された情報としての知識ではなく、有効に活用できるようになっている知識こそ重要だということです。目的にあわせ、新しいものを作り出せるツールとしての知識です。

こういった学び方の学びやデザインとしての知識は、二一世紀に生きていく人たちに必要な能力、世界共通に求められている力なのです。

まなびほぐし

評論家であり、哲学者でもある鶴見俊輔氏は戦前米国に

滞在中、ヘレン・ケラー氏と会って言葉を交わしたときに出てきた「アンラーン（unlearn）」という単語を、「まなびほぐす」と訳しました。

戦前、私はニューヨークでヘレン・ケラーに会った。私が大学生であると知ると、「私は大学でたくさんのことをまなんだが、そのあとたくさん、まなびほぐさなければならなかった」といった。まなび（ラーン）、後にまなびほぐす（アンラーン）。「アンラーン」ということばは初めて聞いたが、意味はわかった。型通りにセーターを編み、ほどいて元の毛糸に戻して自分の体に合わせて編みなおすという情景が想像された。

（二〇〇六年一二月二七日朝日新聞「鶴見俊輔さんと語る　生き死に、学びほぐす」より）

大学に入学したら、これまでやってきた「情報としての知識を獲得する」活動はひと休み。大学という新たな学習環境で、日々の活動の中から新たな意味を作り出す、「セーターを自分の体に合わせて編みなおす」活動をしていきましょう。

Reflect - Collaborate - Design

私は最近、理系女子的生き方を推奨しています。リケジョ的とは、「理系的」と「女子的」を組み合わせた私の造語です。「的」と入っているのがミソなのです。最近よく耳にするリケジョ（理系を専攻している学生、あるいはその分野で活躍している女性）とは、ちょっと違います。

理系的とは、なにごとにも好奇心を持ち、ものごとを論理的、分析的に深掘りしていくこと。女子的とは、友達とワイワイ集まる女子会のように、互いを尊重しながら楽しんでしまえること。自分のやりたいことを見つけて、周りを巻き込み和気あいあいと、仕事場や生活環境などをよりよい方向に変えていく。いろいろな人が集まってアイデアを出し合い、お互いを高め合う生き方、それがリケジョ的生き方です。

そこから派生した「リケジョ的学び方」とは、なにごとにも好奇心を持ち、ものごとを論理的、分析的に深掘りし、そこから、振り返って考え（Reflect）、共同的に行動し（Collaborate）、新しいものを創り出していく（Design）学び方です。

大学の学習環境は、リケジョ的学び方を可能にするように変化してきています。その良さを生かすのはあなた自身です。

「戦争を生きた先輩たち」プロジェクト――〝生きた学びの場〟を創る

松野良一（中央大学総合政策学部教授）

はじめに

「戦争を生きた先輩たち」というプロジェクトは、二〇〇七年からFLPジャーナリズムプログラム松野良一ゼミ[1]の活動として継続してきているものである。中央大学出身者を軸に戦争の時代を生きた先輩たちを、平和な時代を生きる学部生たちが取材し、証言を記録して後世に残していこうという趣旨である。

平和な時代を生きる学生が、素直な気持ちで戦争体験者を訪ね、素直に体験を執筆していく。そうした流れで綴られた文章こそが、それを読む若い人たちの心に伝わるのではないかと考えた。つまり、「無理をしない等身大のルポルタージュ」を目標にした。

その証言ルポルタージュは、書籍『戦争を生きた先輩たち――平和を生きる大学生が取材し、学んだことⅠ・Ⅱ』（中央大学出版部）として刊行された。

第一巻、第二巻の刊行の前後に、多くのマスメディアが、このプロジェクトを取り上げてくれた。その理由として共通していたことは、簡単にまとめると、次のようなことである。

「これまでの報道は、マスメディアが戦争体験者の話を取り上げて、視聴者あるいは読者に一方向で伝えるという方法が主であった。つまり、次の世代に『つなぐ』という視点が欠けていた。それに対して、このプロジェクトは、その『つなぐ』という視点を大事にしている」。

現在も、第三巻（完結編）の刊行を目指して、聞き取り調査を続けている。この第三巻には、戦前、日本統治下にあった朝鮮と台湾から中央大学に学びに来ていた学徒の証言も含める予定である。中央大学は当時、全学生の約一六％を朝鮮・台湾からの学生が占めており、日本の大学で最

多とも言われていた。日本人学徒だけではなく、朝鮮人学徒、台湾人学徒についても、その戦争体験の証言を記録することは、中央大学としての責務であると考える。

なぜプロジェクトを教育に取り入れたのか

では、なぜこのような「取材し執筆する」というプロジェクトを教育に取り入れたのかについて、説明しておきたい。実は、私は大学教員になる前に、二〇年以上にわたり、全国紙の記者、東京キー局のディレクター・プロデューサーを務めた経験を持っている。在職中に博士号を取得したのを契機に大学に移籍した。

私は、記者活動や番組制作の経験を通して、自分の多様な能力が開発・育成されたという実感を持っていた。このため、大学教育の中に、なんとか実戦的な取材活動を取り入れ、学生たちの能力開発のために生かせないかと模索していた。

ジャーナリズム活動というのは、企画から始まって、取材、執筆、アウトプットというサイクルを繰り返す。そのサイクルを繰り返せば繰り返すほど、多様な能力が開発され育成されると考えたのである。

図1をご覧いただきたい。

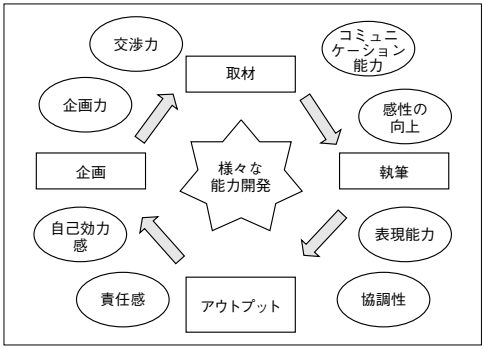

図1　ジャーナリズム活動と能力開発に関するモデル

このサイクルの中で、学生たちは、様々な具体的活動を行う。事前の資料収集と分析、文献の読破とインタビュー項目のチェック、さらには、取材先との交渉とアポ取り。そして、実際に現場に行って観察し、デジカメで撮影する。当事者に会い、インタビューを行い、大学に戻って

有斐閣 新刊案内（価格は税別）
東京・神田・神保町2/Tel:03-3265-6811
http://www.yuhikaku.co.jp/

生活保障のガバナンス
大沢真理著
A5判 3,700円
1980年代以降の生活保障システムを分析。

日本の消費者はなぜタフなのか
日本的・現代的特性とマーケティング対応
三浦俊彦著
A5判 4,300円
日本の消費者のタフさのメカニズムとは。

産業政策のつくり方
アジアのベストプラクティスに学ぶ
大野健一著
A5判 2,900円
アジア，アフリカの産業戦略を分析する。

経営者の報酬の法的規律
伊藤靖史著
A5判 5,800円
経営者の報酬決定を巡る解釈論と立法論。

民事訴訟における手続運営の理論
三木浩一著
A5判 10,000円
民事訴訟理論の再構築を目指す。

◉図書目録送呈◉

テープ起こしと執筆活動を行う。成果は、紙媒体や電子媒体としてアウトプットされる。

この一連の活動の中で、学生たちは、企画力や交渉力、コミュニケーション能力などを向上させていく。活字でも映像でも、自分の努力が目に見える形で成果物となれば、周囲から評価され、やればできるという自己効力感が大きく向上する。今はやりの言葉でいえば、色んな「コンピテンシー」が、このサイクルの中で育成されていく。言いかえれば、「人間力を育てる」モデルである。

プロジェクトはどう展開し、何を得たのか

ゼミ生たちは二〇〇七年に自主的に取材チームを立ち上げ、事務局長を置き、細かい作業の手順を決め、スケジュールを管理しながら活動を進めていった。大学の同窓会、各地の戦友会、戦没学生記念会などと連絡を取りながら、合計で二〇〇人以上に電話や手紙で連絡を取り、約五〇名の戦争体験者に接触し、最終的には取材可能な三三名の方の証言をルポルタージュ形式で記録することができた。

大学の先輩たちの中には、口が重い方もいた。「これまで、家族にも話してこなかったからね……」「あまり、思い出したくないし、体が悪くて長く話せないから……」と電話口で断られた方もいた。しかし、数日後に、「大学の後輩だから、話すよ」「もう最後だから、話しておくよ。後は頼むよ……」と電話をかけてこられた先輩も複数いらっしゃった。

中央大学は一三〇年近い歴史をもっている。戦争体験をもつ元学徒と現在の学部生では、年齢は約六〇年から七〇年も違う。そもそも、想像がつかないほどの時代的ギャップがある。しかし、「中央大学」という細い糸は、意外と強いものであった。

学生たちが記録してきた証言は、多様なものであった。学徒出陣、軍隊生活、特攻隊員の遺書、沖縄地上戦、シベリア抑留、マレー戦線、ビルマ戦線、中国占領地の最後のアナウンサー、終戦後も徹底抗戦を叫んで反乱を起こした航空部隊、震洋特別攻撃隊、特攻直前に終戦になり「今後は平和の特攻隊員たれ！」と命令を受けた飛行兵、特攻機を沖縄方面まで誘導し続けた飛行兵、本土へ疎開中に潜水艦の攻撃で沈没した「対馬丸」乗船者、東京大空襲や横浜大空襲の目撃者、広島原爆被爆者、長野県に設けられた秘密の大本営守備隊……。

また、証言者の言葉は、自らの戦争体験だけではなく、戦争の持つ悲惨さや残虐性、戦争になれば弱い女性や子供が犠牲になるのだということを痛感させてくれた。そして、旧日本軍という組織が持っていた本質と実態についても知ることができた。

二代目の事務局長を務めた総合政策学部三年（当時）の北見英城は、こう感想をまとめている。

「戦争を生きた先輩たちの体験は様々であったし、戦争

と平和、戦争責任や防衛問題、などに関する考え方も様々であった。しかし、一つだけ共通しているものがあった。それは、『二度と戦争を起こしてはならない』ということ。そして、『同じ人間であることを自覚すること』『相手の立場を理解してあげる視点や心の余裕が重要』であることを、先輩たちの証言から学んだ」。

当時、総合政策学部二年だった佐竹祐哉は、ＮＨＫの「視点・論点」に同番組史上最年少で出演し、このプロジェクトについて解説した。彼は、こう総括している。

「戦争について、今まで歴史の教科書の上でしか知らなかった。あの空襲で何人が亡くなった、あの戦争で何人が亡くなったと。しかし、そういう数ではなくて、そこにいた一人ひとりに家族がいて、大切な人がいて、自由な未来があったということ。そして、それが奪われたということ。戦争の現実について、圧倒的なまでのリアリティを実感し、平和の尊さを学んだ」。

学生の進路とその後の活躍

第一巻と第二巻で取材を担当した学生の数は三三人。彼らは、その後、どういう職業に就き、どういう活動をしているのかについて、簡単に紹介しておきたい。

三三人のうち、新聞、放送、出版、広告などのマスコミ業界に就職した者は、二九人に上っている。残りは、一般の民間企業が三人、公務員が一人という内訳である。

マスコミ業界は、新聞は朝日新聞、読売新聞、中日新聞、時事通信社などに計六人。放送はＮＨＫ、東海テレビなどに計八人。出版は文藝春秋、ダイアモンド社など計四人。広告・ＰＲ会社は、電通、博報堂プロダクツ、読売広告社など計一一人。単体としては、ＮＨＫに五人が就職し、最多となっている。

実際に、プロジェクトの参加者たちは、各職場で活躍している。二年目までに「クローズアップ現代」で三回全国放送を出したディレクター、東日本大震災の現場で遺体の引き渡し間違いが多発していることを一面でスクープした新聞記者、皇室の侍医に独占手記を依頼できた編集者など。

彼らがたまにゼミに顔を出して後輩に語ることは、「基本はすべて、ゼミ活動で学んだ」ということである。特に、学生たちが自主的に、グループワークでプロジェクトを遂行した経験が、社会でも大変役に立っているという。

現代日本の大学での学びについて

私は二〇数年ぶりに実社会から大学に戻ってきて、驚いたことがある。それは、大学教育のフレームが、昔とあまり変わっていないことである。教授が、大教室でレジュメを配布して、一方向的に延々と授業を行う。欧米の書物を輸入・翻訳してスタンダードを作り、さらに方法論を借用して一般書を書きつづる。その古典的なフレームだけでは、社会が必要としている人材は育てられないように思える。

そろそろ、教員の視座から学生の視座に移行して、コミュニケーションをデザインし直す時期が来ているように思う。

社会では、自主的に問題を発見し、グループワークで解決策を見出し、実行していくという能力が要求される。そういう能力を養うには、学生が問題意識を持って大学の外に出て、現場に行き、当事者に話を聞くという作業が必要である。図2をご覧いただきたい。

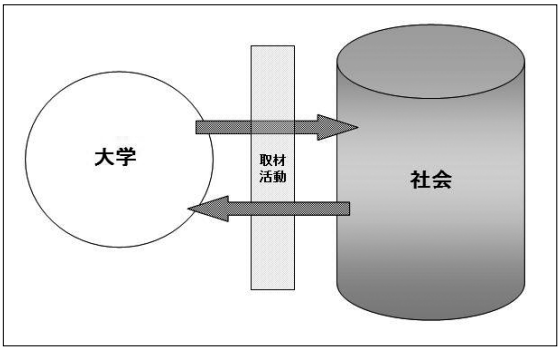

図2　取材活動を通した社会と大学の相互作用

普通の学生は、講義棟、図書館、学食、サークル棟など、キャンパス内で過ごそうと思ったら、それが可能である。そして、気のあった仲間とだけ付き合おうと思えば、それも可能である。つまり、大学というクローズドな空間で、同世代の学生とだけ付き合い、大学時代を終わってしまう学生は結構多い。しかし、それでは、コミュニケーション能力は向上しないし、社会的なスキルや意識も育ちにくい。

逆に、大学の外に出て、年代の違う人や社会の様々な職業人と対話することができれば、社会人に必要とされる様々な能力を向上させることができる。

今回のプロジェクトは、学外で活動するという意味のほかに、歴史的事実と接触するという意味があった。戦争体験者の証言を記録する作業のプロセスの中で、学生たちは、人間とは何か、人間が作り出した組織・社会・国家とは何か、なぜ戦争は起きるのか、未然に防ぐにはどうすればよいのか、などの問題にぶつかり、自らが考えるきっかけになった。

大学内での学習・研究、そして大学外でのプロジェクト学習。この二つの組合せが、現代を生きる学生にとって、極めて重要であると考える。

（1）FLPとは、ファカルティ・リンケージ・プログラムの略で、中央大学が二〇〇三年から始めた学部横断型のゼミである。ジャーナリズムや国際協力など、五分野のプログラムが設定されている。ゼミ生は、全学部からの公募で筆記・面接試験を経て選抜される。このため一つのゼミが様々な学部の学生で構成され、モチベーションも高い。

大学出版部ニュース

×月○日

湯島に事務局があった頃は、所用で本郷の東大出版会に行くこともあったので、中古の自転車をおいて重宝したのである。それが九段北のビル四階に越してからは、ほぼ無用の長物となった。外の通路で廃物同然の態であったが、駒場に移った東大出版会にひょんなことからもらわれていって、どうやら今は大いに活躍中であるとのこと。

×月○日

国立大学法人滋賀大学の横山俊夫副学長らお三方が事務局にご来訪。滋賀県内の大学、出版社、博物館などと連携しながら学術出版事業の準備に入っているとのことで、協会側は理事長、副理事長、事務局長が同席して情報交換をした。近江関係史料や琵琶湖の自然調査報告など、出版のためのコンテンツは豊富にあるように拝聴した。すでに懇話会のような形で会合も重ねられており、協会としても注視していきたい団体である。

×月○日

第七回常任理事会の開催案内を、メールで関係者に送付。前回議事録（案）、常任理事会次第、委任状などを添付する。

×月○日

朝がた男性の訪問者あり。プロバイダーの売り込みで、界隈をセールスに歩いているという。都心のマンションの一室だが、たまに跳びこみの勧誘がある。

×月○日

昼近くなって、遠くから救急サイレンが聞こえてきた。今日は月例の事務局会議の日。一五時スタートが、OS交換後のパソコン絶不調のために一時間遅れ。パソコンもよくないが、対応力不足のわれわれにも責任がありそうだ。最後はおたがいソッポ向く感じで、会議に入る。今日のテーマは、新しく発足する「交流事業部」に何を期待するか。この十年ほどで全国あちこちに大学出版会が産声をあげたが、それぞれに苦心なさっているようだ。その只中にあって、協会は何をどうしていくのか。まだ手探りの議論だが、協会の既成の枠をこえて全国の大学出版活動の支援と広報をしていかないといけないと思う。　（事務局日誌より）

北海道大学出版会

▼朴鍾碩著『**北朝鮮経済体制の変化 1945～2012―社会主義圏の盛衰と改革・解放**』（A5判・七〇〇〇円）北朝鮮経済の変化を歴史的・理論的に概観する。

▼滝澤春男著『Continuing Lessons for Dynamics of Structures』（B5判・一四〇〇〇円）構造動力学の学問体系を整然と纏めた学術書。

▼櫻井義秀著『**カルト問題と公共性―裁判・メディア・宗教研究はどう論じたか**』（A5判・四六〇〇円）精神の自由や人権等高度に公共的な問題を問い直す。［現代宗教文化研究叢書2］

▼三木英著『**宗教集団の社会学―その類型と変動の理論**』（A5判・四八〇〇円）通（宗教）文化的比較を可能にする理論を構築。［現代宗教文化研究叢書3］

▼小磯修二・草苅健・関口麻奈美著『**コモンズ　地域の再生と創造―北からの共生の思想**』（四六判・二六〇〇円）地域社会のあらたな発展の可能性を考える。

▼岩下明裕・木山克彦編著『**図説ユーラシアと日本の国境―ボーダー・ミュージアム**』（B5判・一八〇〇円）国境・境界の問題を知るためのビジュアル本。

弘前大学出版会

▼『弘大ブックレットNo.11　津軽から発信！　母国を離れプロフェッショニに生きる　国際コーディネーター編』弘前大学人文学部柑本英雄ゼミブックレット編集委員会編（A5判・一三八頁・八〇〇円）現役学生編集によるブックレット。心地よい「母国」を離れ、様々な苦労を重ねてきた、国際協力のプロフェッショナル達のキャリア形成の過程を明らかに。

▼『まいまいさんとなめくじさん』絵と文：おのななせ、監修：佐藤光輝（A5判・三〇頁・一二〇〇円）学生の卒業制作が絵本に！

▼『東日本大震災　弘前大学からの展望』弘前大学震災研究交流会編（A5判・二五二頁・一六〇〇円）弘前大学に集まった研究者や市民による「震災通信」。

東北大学出版会

▼杉田泰一・輪田稔編『細谷貞雄　ニーチェ特殊講義』（A5判・三〇〇〇円）昭和四〇年前後に東北大学文学部で三年間行われた講義の貴重な再録。

▼瀬戸一夫著『カントからヘルダーリンへ　ドイツ近代思想の輝きと翳り』（A5判・四〇〇〇円）　コペルニクス、カント、フィヒテ、ヘルダーリンをめぐり、ドイツ近代思想の光と影から見える実像を明らかにする。

▼大友展也著『新聞原典史料「アヴィーゾ」「レラッティオーン」　新聞発達史上の午前0時について』（A5判・二二〇〇円）

▼石田秀輝・古川柳蔵著『地下資源文明から生命文明へ　人と地球を考えたあたらしいものつくりと暮らし方のか・た・ち　ネイチャー・テクノロジー』（B5判・三〇〇〇円）

▼藤田恭子著『「周縁」のドイツ語文学　ルーマニア領ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たち』（A5判・六六〇〇円）

▼李郁蕙著『日本語文学を読む』（A5判・三〇〇〇円）

※第9回東北大学出版会若手研究者出版助成採択作品

流通経済大学出版会

▼『基礎ミクロ・マクロ経済学講義ノート』河合榮三著　（B5判・八二頁・本体九〇〇円）

本ノートは、ミクロとマクロの各経済学の体系的で最低限の基礎理論を解説したものです。初めて経済学を学ぶ皆さんが経済学に興味を持ち、より一層学んでいくためのインセンティブ（誘因）を与えることを目的としています。この目的のために筆者が特に心がけたことは、①できる限りシンプルでクリアな説明をすること、そして②理論と現実のつながりをできるだけ考慮に入れた味わい深いノートにする、ということです。さらに、本ノートの最大の特徴は現代マクロ経済学の常識を再検討することにあり、通常のテキストとは明らかに一線を画しています。現代マクロ経済学の常識とは、賃金・価格が十分に伸縮的である限り、マクロ経済は完全雇用均衡を達成するというものです。筆者はこのような常識に疑義を唱えています。その疑義を、（理論的分析は一切省いて）実証的根拠にもとづいた検討とそれにもとづいた推測に限定して説明しています。

聖学院大学出版会

▼髙橋義文『**ニーバーとリベラリズム――ラインホールド・ニーバーの神学的視点の探求**』（A5判　予価八〇〇〇円）バラク・オバマ米大統領がその影響を受けていることを明言したことによって関心を集めることとなったニーバー。その思想の特質の明確化を試みる。神学的リベラリズムと政治的リベラリズムとの明示的・暗示的な取り組みを背景に、ニーバー特有の歴史との関係における超越的神学的視点を明らかにする。

▼村松　晋『**近代日本精神史の位相――キリスト教をめぐる思索と経験**』（A5判　予価六八〇〇円）近代日本の思想家のキリスト教をめぐる「論理」を、そこに通底する世界（精神の原器とも言うべきもの）に焦点を当てて論じる。第一部「新渡戸・内村門下への一視角」では、前田多門、南原繁と坂口安吾、松田智雄を、第二部「キリスト教受容の諸相」では、地方の一小学校教師、波多野精一、氷上英廣、井上良雄を、第三部「『近代の超克』とカトリシズム」では、吉満義彦を論じている。

聖徳大学出版会

▼聖徳大学特別支援教育研究室編『**改訂版　一人ひとりのニーズに応える保育と教育―みんなで進める特別支援―**』（A5判・二一八頁・一五二八円）

特別支援教育について子どもの理解と指導・支援に必要な基礎知識を初学者にも分かりやすく解説した。幼児期及び児童期に焦点を絞り、初期段階における適切な指導・支援を行うためのノウハウが充実している。

▼村井靖児著『**音楽療法を語る―精神医学からみた音楽と心の関係**』（四六判・二八〇頁・二〇〇〇円）

著者が普段実践している診療やセッションをふまえ音楽療法とは何か、なぜ音楽はヒトの心に響くのか、音楽と心の関係を解き明かす。日野原重明氏（聖路加国際病院理事長・同名誉院長）推薦。

麗澤大学出版会

▼成瀬　猛著『**マイウェイ国際協力――中東・アフリカ・アジア三十年の軌跡**』（四六判・二四八頁・一六〇〇円）バングラデシュ、シリア、ケニア、パレスチナ等激動の地でのJICA職員三十年の経験を迫力ある文章で語り、その「真剣勝負」の姿は感動をもたらす。そして、著者は世界に飛び出す勇気をもつことの大切さと意義を熱く説く。

▼倍　和博著『Deployment of Financial Reporting Theory based on Global Governance』（A5判・二二四頁・三〇〇〇円）企業に求められるこれからの財務報告とは？　第Ⅰ部では「グローバル・ガバナンスに基づく財務報告」に関わる新たな課題の検証を試み、第Ⅱ部ではCSR活動を明確にする会計手法を考究する。グローバル時代の財務報告の方向性を意欲的に提示する。英文図書。

慶應義塾大学出版会

▼井筒俊彦著『**井筒俊彦全集　第四巻**』（四六判・六二四頁予定・六八〇〇円）一九五四年から一九七五年の間に刊行された日本語著作を収録。代表著作「イスラーム思想史」のほか、アラビア・トルコ・ペルシア文学を名文で紹介する辞典執筆項目（単行本未収録）、カナダやイランでの研究生活を伝える珠玉のエッセイ、新境地となる禅的言語論等を収録。

▼イアン・ハッキング著／広田すみれ・森元良太訳『**確率の出現**』（四六判・四〇四頁・三八〇〇円）フーコーの考古学の手法を用い、確率の「出現」を一六六〇年前後の一〇年間に起こった歴史的必然として、医学などとの関わりの深いその前史から鮮やかに描き出す。確率の本質に迫る好著、待望の邦訳！

▼伊藤友治著『**報道人の作法――メディアを目指す人たちへ**』（四六判・三〇四頁・二〇〇〇円）新聞・テレビで報道現場を歩んできた著者が、取材活動の基本から、経験に基づく具体的注意事項、報道倫理までを語る。「報道人」として知っておくべき作法と技術をまとめたメディア志望者必読の一冊。

産業能率大学出版部

▼『**ＩＳＯ３９００１道路交通安全ｎマネジメントシステム認証取得がわかる**』入口秀俊・江波戸啓之共著（Ａ５判・三五〇〇円）。認証取得に向けて具体的な「実践方法」とその「ツール（規程文例など）」の説明とデータ提供を目指した「実用書」。

▼『**日本流「おもてなし」文化は世界的資産―ビジネスを成功に導く秘訣がここにある！**』武田哲男著（四六判・一八〇〇円）。国内外で評価され、成功している日本流おもてなしの企業事例を紹介し、日本流おもてなしの今後の方向性と課題を考察。

▼『**社会人のための産業カウンセリング入門**』今村幸太郎・杉山雅宏・山蔦圭輔・渡部卓・渡邉祐子共著／宮城まり子編著（Ａ５判・二八〇〇円）。最新の研究成果を網羅しつつ、学術的で難解な表現を避け、誰にでもわかりやすい内容で解説した入門書。

▼『**ガストロノミー食を楽しむ知識と知恵**』佐原秋生著（Ａ５判・二〇〇〇円）普通の人たちがうまいものをたらふく食べる知識と知恵をあなたに。

専修大学出版局

▼『**日中戦争期における汪精衛政権の政策展開と実態**』小笠原強著（Ａ５判・二四四頁・本体二八〇〇円）

日本軍占領下の南京で成立した汪精衛政権は、その傀儡性を指摘する研究傾向もあったが、著者は汪政権が行なった内政、特に治水・灌漑事業に注目した。淮河の堤防修復工事や、水利執行機関とその主な政策を列挙して、事業の特徴を検討し、政権が増水被害や食料不足の解消に努めたことをあげている。日中戦争期に行われた民政としての検討を深めている。

▼『**非金融負債会計の研究―蓋然性要件の取扱いを中心として―**』松本徹著（Ａ５判・二一四頁・本体二八〇〇円）

「非金融負債」というテーマは，未だ会計基準としての結論を得ていない。また非金融負債（引当金）に関してまとまったものも見当たらない。本書は，次の三つを課題とし，その解明に取り組んでいる。「非金融負債」はどう会計処理されるべきか。「資産除去債務」の会計処理の矛盾点と解決策の考察。「蓋然性要件の削除」の再検討の必要性の提示。

大正大学出版会

【既刊紹介】

▼多田孝文監修　塩入法道・池田宗譲編『**天台仏教の教え**』（四六判・三三二頁・一九〇〇円）

最澄によってもたらされた中国天台思想は日本・比叡山で開花した。これは浄土・禅など各宗の祖師が比叡山で学んだことにも現れている。本書はその天台宗の歴史と教義を平易に解説している。

▼小澤憲珠監修　勝崎裕彦・林田康順編『**浄土教の世界**』（四六判・四一八頁・一九〇〇円）

本書は三国伝来（インド・中国・日本）の浄土思想を網羅的に概説する。また、現代社会での事例も含めて浄土教が日本文化（文学・民俗・社会事業など）に与えた影響を論述する。

▼小峰彌彦監修　榊義孝・本多隆仁編『**真言密教を探る**』（四六判・三六六頁・一九〇〇円）

本書はインド・中国・日本・チベットの密教や『大日経』『金剛頂経』『理趣経』などの根本聖典を平易に論述。また、真言密教と日本文化として、美術・書道・文学や修験道・四国遍路などに言及する。

玉川大学出版部

▼ケイ・J・ガレスピー他編著、羽田貴史監訳『**FDガイドブック―大学教員の能力開発**』（A5判・三四〇頁・三八〇〇円）理論と実践が融合したファカルティ・ディベロップメント（＝教員の能力開発）の基本図書。教育開発担当者に求められる役割と身につけておかねばならない知識・スキル、部局や教員との関係づくり、大学の種類に対応した取り組み、教員の能力を開発するプログラムの具体例をあげ、よくある課題とその解決策を詳しく解説する。すべてのFD関係者必携の書。

▼ダネル・スティーブンス他著、佐藤浩章監訳『**大学教員のためのルーブリック評価入門**』（B5判・二〇四頁・二八〇〇円）採点時間を節約するだけではなく、効果的なフィードバックを与え、学生の学習を促す評価に関わるツールである「ルーブリック」。ルーブリックの作り方から使い方、さまざまな授業場面での活用方法までを具体的に紹介。学生の成績評価や授業の道具として使おうと考えている大学教員必読の一冊。教育・学習の過程を大きくサポート。

中央大学出版部

▼長尾一紘著『**外国人の選挙権―ドイツの経験・日本の課題**』（二三〇〇円）違憲判決、激論、憲法改正、参政権の導入。ドイツの経験から今後の日本を考える。

▼佐々木正道編著『**信頼感の国際比較研究**』（三七〇〇円）グローバル化、情報化、そしてリスク社会が拡大する現代に、相互の信頼の構築のための国際比較意識調査の研究結果を中心に論述する。

▼森岡実穂編著『**アップデートする芸術―映画・オペラ・文学**』（二八〇〇円）映画やオペラ、「百科事典」やギター音楽、様々な形態の芸術作品を「いま」の批評的視点からアップデートする論考集。

▼妹尾達彦編著『**アフロ・ユーラシア大陸の都市と国家**』（三一〇〇円）相互に結びつきを強めるアフロ・ユーラシア大陸の歴史を、都市と国家の関連に焦点を合わせ系統的に解明する最新の研究書。

▼岸真清・黒田巖・御船洋編著『**グローバル化の地域金融**』（四八〇〇円）地方分権化、共助社会の視点から地域経済活性化とグローバル化を実現する金融システムを日本、アジア諸国を対象に考察。

東京大学出版会

▼酒井邦嘉編・曽我大介・羽生善治・前田知洋・千住博『**芸術を創る脳――美・言語・人間性をめぐる対話**』（四六判・二七八頁・二五〇〇円）

なぜ音楽は楽しいのか（曽我大介）、なぜ将棋は深遠なのか（羽生善治）、なぜマジックは不思議なのか（前田知洋）、なぜ絵画は美しいのか（千住博）――音楽・将棋・マジック・絵画の第一人者と気鋭の言語脳科学者による、刺激あふれる知的対談集。人間の言語能力を手掛かりに、美的感覚を背景とした「芸術の力」の核心に迫り、創造的能力の条件をさぐる。

▼東大ＥＭＰ・横山禎徳編『**東大エグゼクティブ・マネジメント　デザインする思考力**』（四六判・二五六頁・二〇〇〇円）

知の最先端で活躍する人たちは、どのような思考や方法を形成してきたのか――卓越した研究成果をあげる六名（村山斉・難波成任・池内恵・江崎浩・小野塚知二・井上将行）に、先端的研究の現在や思考をダイナミックに展開する方法をインタビュー。『**東大エグゼクティブ・マネジメント　課題設定の思考力**』に続く、リーダー育成プログラムの成果。

東京電機大学出版局

▼伊東正安・望月剛著『**医用音響工学**』（Ａ５・二七二頁・三〇〇〇円）

超音波を始めとする「音」を用いた計測や診断が医療の現場にて用いられている。本書は、理工学部や医療学部、医用生体工学部などを専攻する学生が、音の基本事項を、順を追って学び理解できるようまとめた一冊である。「音」を利用した応用技術として、血流計測や超音波診断装置を例に挙げ、理論や仕組みについてわかりやすく解説した。豊富な図と演習問題で、工学分野の初学者でも理解を深められる。

▼岡田清監修・森忠次編著・内田修・小泉俊雄他著『**測量学　第２版**』（Ａ５・三八〇頁・三六〇〇円）

地上の位置関係を正確に測量することは土木工学の根底をなすものである。本書は、測量学の教科書として、基本的事項の習得に主眼を置いて解説している。多くの演習問題とそのくわしい解答を通じて、実務に結びついた知識を会得できるよう構成した。

法政大学出版局

▼Ｊ・デリダ／合田正人・谷口博史訳『**エクリチュールと差異**』〈新訳〉（五六〇〇円）痕跡、差延、脱構築などデリダ的概念を展開し、哲学的思考を根底から書き換えた名著。ウニベルシタス一〇〇〇番到達記念として新訳刊行！

▼Ｍ・エリアーデ／前野佳彦訳『**加入礼・儀式・秘密結社**』（四八〇〇円）未開社会の社会構成における加入礼の基本構造・形態・本質を宗教史的に探究した、エリアーデ自身の最大のライフワーク。

▼Ｍ・ゼール／加藤泰史・平山敬二監訳『**自然美学**』（五〇〇〇円）なぜわれわれは自然に好感を抱くのか。自然を美的に知覚する可能性を体系的・規範的に記述し、美学の根源に新たな可能性を探る。

▼Ｕ・ベック／山本啓訳『**世界リスク社会**』（三六〇〇円）原発事故、環境汚染、経済破綻など、いまわれわれが直面する新たな〈リスク〉とは何か？

▼田辺悟著『**磯**』（三九〇〇円）豊かな恵みをもたらす磯と人間の関係の歴史を信仰や民俗・伝承に探り、磯とともに生きた人々の生活誌と漁法を全国各地の実地調査によって具体的に明らかにする。

武蔵野大学出版会

▼廣瀬裕之著『**刻された書と石の記憶**』（A5判・二二四頁・本体二〇〇〇円＋税）武蔵野に建つ三基の石碑を例にとり、書（揮毫）、刻、石の三要素から解析。碑文の解釈、採拓（拓本）とその分析など、「刻された書」から入る書の研究書。

▼藤原千賀著『**男女共同参画社会と市民**』（A5判・二一六頁・本体二〇〇〇円＋税）男女が共に暮らし、働き、学び、決定する男女共同参画社会の実現への歴史と成熟への展望。教育、就労、政治、家庭などの各領域で、性別役割分業の文化から自由になり、主体的な選択と活動ができる社会の実現のために市民のとるべき行動を論じる。

▼舞田敏彦著『**教育の使命と実態**』（A5判・四三〇頁・本体二八〇〇円＋税）著者の『47都道府県の子どもたち』、『47都道府県の青年たち』に続く、統計から論じる教育社会学の著作第三弾。わが国の教育の「あり方」に真っ向から取り組み、教育が格差の再生産に加担している現実を統計データの分析から明らかにする。

▼五味政信著『**五味版　学習者用ベトナム語辞典**』刊行間近。

武蔵野美術大学出版局

▼『**美術教育資料研究**』大坪圭輔著（A5判、四三六頁、二六〇〇円）美術教育が担うべき真の役割とは？チゼック、リード、山本鼎、岸田劉生…先人に学び、美術教育の将来を展望する。近・現代、国内外の代表的な美術教育資料を多数取り上げながら、社会における美術教育の変遷を学ぶとともに、過去の実践や文献を通して美術教育の基本的な理念と真の意味を考察する。美術教育のこれまでを知り、これからを考える一冊。

▼『**美術教育の題材開発**』三澤一実監修（A5判、四三二頁、二六〇〇円）美術とは何かを問いながら、常に研鑽し、授業の枠を社会にまで広げるような図画工作・美術の教員になるための必携書！学習指導要領の理解を深め、具体的な学習計画・授業計画を学んだうえで、美術教育の実践者一八人による五〇もの豊富な事例から、しなやかな美術教育、これからの美術教師を模索する。

▼『**新しい教師論**』高橋陽一編（A5判、二六〇頁、一九〇〇円）第2期教育振興基本計画で変動する教員制度を踏まえた基本的解説書。

明星大学出版部

▼『**教職入門　専門性の探究・実践力の練成**』青木秀雄編（A5判・二八八頁・一六〇〇円＋税）教師に求められる資質能力、その責任と義務は？　教員養成の歴史、学校の組織・運営、取り巻く社会環境・教育法規、さらに教育行政と学校との関わりなどを論述しながら、教員に最も必要となる知識と心構えを解説する。

▼『**現代初等教育課程入門**』青木秀雄編（A5判・三〇六頁・一六〇〇円＋税）

▼『**現代中等教育課程入門**』吉冨芳正編（A5判・二九八頁・一六〇〇円＋税）

▼『**教職実践演習　磨きあい高めあう熱意ある教師に**』青木秀雄編（A5判・二七二頁・二一〇〇円）

▼『**教育原理**』佐々井・樋口・廣嶋著（A5判・一九〇頁・一四七〇円）

▼『**第2版　子どもの発達と環境―児童心理学序説**』塚田紘一著（A5判・二四一五円）

▼『**心の科学―基礎から学ぶ心理学**』林洋一監修　本多明生・大原貴弘編（A5判・一九九五円）

関東学院大学出版会

▼バプテスト研究プロジェクト編『**バプテストの教育と社会的貢献**』（二四〇〇円）本書はバプテストの教育を主題にした論集であり、ドイツ・バプテスト神学教育の他、日本の女子教育を担った宣教師A・H・キダー、C・A・カンヴァース、A・S・ブゼルに関する論考、また東京バプテスト女子学寮の歴史、さらに新生論に基づくバプテスト教育理念など、五人の専門家による貴重な研究成果である。

▼バプテスト研究プロジェクト編『**バプテストの宣教と社会的貢献**』（二四〇〇円）本書は近代バプテストの宣教論を構築したフラー神学紹介と、ロジャー・ウィリアムズの政教分離思想研究、さらに日本で教育を通して宣教を進めたA・S・ブゼルのバプテスト派独自の教育理念解明など、四人の研究者による労作。

▼バプテスト研究プロジェクト編『**バプテストの歴史的貢献**』（二四〇〇円）英国バプテストの日本伝道、日本におけるバプテスト派婦人宣教活動、同派の女性教育、日本基督教団残留バプテスト派研究など、未着手の歴史を解明する。

東海大学出版会

▼『**日本産稚魚図鑑 第二版**』沖山宗雄編（B5判・二分冊＋二別冊・総一九〇〇頁・本体四二〇〇〇円＋税）

一九八八年刊行の『日本産稚魚図鑑』の大改訂版。約一五〇〇種に及ぶ稚魚を収録し、最新の知見・情報を盛り込み、五〇〇〇枚の精密な図版で稚魚を識別・同定する。稚魚分類に関する基礎情報を詳しく解説し、海外の読者の利用の便を考慮して一部に英文による手引きを加え、さらには魚卵の章においてカラー図版を採用した。魚類学研究者のみならず、生態学、環境技術分野など多方面の関係者必携の図鑑。

▼『**ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会**』田中辰明著（B5変型判・二四八頁・本体四〇〇〇円＋税）

ベルリン、日本、トルコに残るブルーノ・タウトの全ての建築作品を眺めながら、タウトの二人の伴侶、弟で建築家のマックス・タウトのことなどあまり知られていない事柄を紹介し、これまで誤解されてきた説をただしながら、波乱に満ちた生涯を辿っていく。オールカラーのブルーノ・タウト決定版。

名古屋大学出版会

▼『**美食家の誕生―グリモと〈食〉のフランス革命―**』橋本周子著（本体五六〇〇円）食卓のユートピアへ――。フランス料理の飛躍をもたらした「美食批評」の誕生の時を捉え、〈よく食べる〉とはどのようなことかを探究した力作。

▼『**山下清と昭和の美術―「裸の大将」の神話を超えて―**』服部正／藤原貞朗著（本体五六〇〇円）貼絵が広く愛され続ける一方、芸術の世界にも福祉の世界にも落ち着く場所のなかった山下の存在を通して、現在へとつながる昭和の時代を問い直す。

▼『**日本型排外主義―在特会・外国人参政権・東アジア地政学―**』樋口直人著（本体四二〇〇円）ヘイトスピーチはいかにして生まれ、なぜ在日コリアンを標的とするのか？　謎の多い実態に社会学からのアプローチで迫る。

▼『**中国経済史**』岡本隆司編（本体二七〇〇円）現在だけを見ていては中国はわからない。そのしくみと、中国経済が今日抱える矛盾の由来を示して、先史時代から改革開放までを一望する、わが国初の画期的通史。

三重大学出版会

▼**『温泉とは何か―温泉資源の保護と活用―』**森　康則著、A5版一六四頁、二一〇〇円。増刷版。まえがき／第1章　温泉の基礎・温泉成分の分析と掲示・温泉の定義・温泉資源の特性・温泉の分類・療養泉と線質・禁忌症、適応症と注意事項・温泉法に定める許可／第2章　温泉付随ガス中の可燃性ガス・災害リスクの低減・炭化水素の起源・可燃性天然ガスの濃度の単位・測定方法と基準値・安全対策・温泉付随ガスの有効活用と背景・石油代替エネルギーとしての実用化検討事項・総括／第3章　温泉掘削規制の妥当性・枯渇リスクの顕在化・温泉法の立方趣旨・行政訴訟の判例と課題・距離規制の妥当性・温泉資源の保護に関するガイドライン・温泉資源賦存に関するデータの必要性・距離規制の有効性に関する実例研究／第4章　集湯能力調査と影響調査の目的・集湯能力調査の実施方法・影響調査の実施方法・調査結果の解釈・集湯能力調査と影響調査に関する事例研究・総括／第5章　温泉療養と健康作り／索引／用語解説。

京都大学学術出版会

▼近藤正己・北村嘉恵他編**『内海忠司日記1928―1939』『同1940―1945』**（前篇一二六〇〇円、後篇一二〇〇〇円、完結）台湾での官僚生活から、辞職し東京で終戦を迎えるまで、地方長官の日常を仔細に記した日記・回想録。現地住民、在台日本人、軍、産業人、本国政治家など多様なアクターが重層的に形成する日本植民地の権力構造に迫る。

▼檀上　寛著**『明代海禁＝朝貢システムと華夷秩序』**（東洋史研究叢刊、七四〇〇円）明代の国際秩序や通商秩序について、明代の初めに成立した朝貢一元体制を支える「海禁＝朝貢システム」と、中国の周辺国と商業取引する「互市」の体制とを、礼でもって治める「天朝体制」の構図の中で統一的にとらえる。

▼安岡健一著**『「他者」たちの農業史―在日朝鮮人・疎開者・開拓農民・海外移民』**（四〇〇〇円）在日朝鮮人、疎開者、開拓農民、戦後の海外農業移民といった、農村にとって外部の存在すなわち「他所者」の視点から二十世紀の日本社会の大変動を捉え、定住者の歴史観と違う農村像、日本を描く意欲作。

大阪経済法科大学出版部

▼環山楼市民塾の講演記録集**『未来を発信する八尾・環山楼市民塾』**各三冊の主要目次を紹介します。【2009】特別寄稿　世界経済と日本経済を俯瞰する（本間正明）／①文化遺産学のたのしさ（高橋隆博）／②ごみ問題の経済評価とまちづくり（坂田裕輔）／③ものづくりと産業組織論（箱田昌平）／④国際的労働力移動（村下　博）／⑤ITの進化と現代経営の基本問題（能塚正義）／⑥日本における特許法の歴史のあらまし（岩村　等）／⑦活性化する東北アジアの現状と将来の展望（藤本和貴夫）【2010】①激動する世界と日本経済の活路（本間正明）／②今、求められるリーダー像（関　淳）／③宇宙ビジネス（河島信樹）／④地域の環境政策を考える（坂田裕輔）／⑤現代社会と企業の社会的責任（能塚正義）／⑥東アジアにおける日本の道（藤本和貴夫）【2011】①日本経済の現状と展望（本間正明）／②レーザーの医療応用（河島信樹）／③「地域市民塾の可能性」（初谷　勇）／④高度情報化社会に生きる（能塚正義）／⑤EUと「東アジア共同体」（藤本和貴夫）

大阪大学出版会

▼大阪大学ショセキカプロジェクト編『**ドーナツを穴だけ残して食べる方法 越境する学問―穴からのぞく大学講義**』（一五〇〇円）学生・教員・出版会コラボプロジェクトの集大成。研究者たちがドーナツ問題に挑み学問の奥深さに魅了される。▼高橋照彦・中久保辰夫編著『**野中古墳と「倭の五王」の時代**』（二二〇〇円）大阪大学総合学術博物館展示図録。発掘以来未公開であった甲冑を初公開。▼高橋京子著『**森野藤助賽郭真写「松山本草」森野旧薬園から学ぶ生物多様性の原点と実践**』（三三二〇〇円）「松山本草」全巻をフルカラーで初公開。▼坂内千里著『**経部引用書から見た「説文解字繫傳」注釈考**』（六九〇〇円）▼森岡裕一著『**アメリカ文化のサプリメント　多面国家のイメージと現実**』（二一〇〇円）▼鈴木暁世著『**越境する想像力　日本近代文学におけるアイルランド**』（四七〇〇円）▼池田淑子著『**映画にみる日米相互イメージの変容　他者表象とナショナル・アイデンティティーの視点から**』（二八〇〇円）▼斉藤弥生著『**スウェーデンにみる高齢者介護の供給と編成**』（五二〇〇円）

関西大学出版部

▼永田憲史著『**財産的刑事制裁の研究―主に罰金刑と被害弁償命令に焦点を当てて―**』（A5判・三七〇〇円）アメリカやドイツなどの制度・運用・理論を素材に、財産を対象とする刑事制裁について包括的に考察する。罰金刑の目的について新たな提案を行い、量定方法に関する議論に新風を吹き込む。刑罰論に新たな視座を提供する注目の理論書である。▼ハンス・シュナイダー著／芝田豊彦訳『**ドイツにおけるラディカルな敬虔主義**』（A5判・二五〇〇円）厳密な考証に基づく敬虔主義運動の真相解明を試みる。従来の敬虔主義を正しく理解するうえにも必須の人物や運動が興味深く描かれている。詳細な原注に加え、訳注・人名及び著作名索引も付した。▼松浦章著『**近世東アジア海域の帆船と文化交渉**』（A5判・四五〇〇円）近世東アジアの海域で活動した帆船、特に積極的に海洋進出を行った中国帆船や和船などによる文化交渉について述べている。どのようにして言語接触がなされたかや、日本と東アジアの国々で行われた貿易などを紹介している。

関西学院大学出版会

【新刊】

▼J・H・ベイカー著　深尾裕造訳『**イギリス法史入門　第4版　第Ⅰ部（総論）**』（A5並製・五〇四頁・四五〇〇円）イギリスで法制史の標準的教科書として使用される原著第四版の翻訳書。第三版から大幅に書き換えられたJ・H・ベイカーの大著。▼波部雄一郎著『**プトレマイオス王国と東地中海世界―ヘレニズム王権とディオニュシズム**』（A5上製・三二〇頁・二八〇〇円）プトレマイオス朝は多文化民族からなる王国を約三百年間どのようにして支配し続けたのか。ヘレニズム時代の評価に一石を投じる。▼西川隆蔵著『**教育相談基礎論―学校での教育相談活動の方法と実際**』K.G.りぶれっとNo.36（A5並製・九八頁・九〇〇円）学校での教育相談活動の方法と実際。▼杉浦　司著『**新説　情報リテラシー―ソーシャル時代を生き抜くための情報スキル**』（A5並製・二五〇頁・二三〇〇円）ITトラブルをなくすための情報教育とは。

広島大学出版会

▼**『名前で読み解く英文学―シェイクスピアとその前後の詩人たち―』**吉中孝志著（四六判・一五九頁・八九〇円＋税）

英文学の名著に登場する人物の名前に隠された、著者自身や愛するひとの名前の痕跡を分析することによって、詩人たちの生きた時代や彼らの心を読み解こうとするユニークな作品。著者の長年に亘る英文学研究と学生との知的接触の中から集められた宝石のような鍵をもって、現代の若者を深く英文学の世界に誘わんとする意欲作。

▼**『中国高等教育の拡大と大卒者就職難問題―背景の社会学的検討―』**李敏著（A5判・二四九頁・三六一九円＋税）

20世紀末に始まった中国の高等教育の「大躍進」。それに伴う大卒者の深刻な就職難。はたして中国の高等教育の大衆化は、大卒者の就職難を引き起こした「元凶」なのか。緻密なデータ分析に基づき、中国の高等教育及び大卒者の就職プロセスや経路・大卒者の意識等、現状を探り問題の先行きを予測して、高等教育計画の可能性について検討する作品。

九州大学出版会

▼浜本満**『信念の呪縛―ケニア海岸地方ドゥルマ社会における妖術の民族誌―』**（A5判・八八〇〇円）ケニアの一社会の妖術信仰に焦点を当て、特異な信念形態が社会の人々をどのようにして呪縛しつづけるのか、その仕組みを明らかにする。

▼萩島哲**『複眼の景観―ベルナルド・ベロット　構図を読む―』**（B5判・五六〇〇円）バロックの景観画の解読を通して現代の街づくりに求められる発想と新たな視点を提供する。

▼滝波章弘**『〈領域化〉する空間―多文化フランスを記述する―』**（A5判・五四〇〇円）空間を境界づけ、場所を特徴づけるという意味での〈領域化〉と、多彩な風土や多様な人々という意味での「多文化」との関係を、フィールドワークとテクスト分析で捉える。

▼川西裕也**『九州大学人文学叢書5　朝鮮中近世の公文書と国家―変革期の任命文書をめぐって―』**（A5判・三八〇〇円）官僚任命文書の史的展開を考察し、東アジア諸勢力との関係、高麗・朝鮮王朝の国家制度と思想文化状況を解明する。

編集後記

姜尚中先生へのインタビューのなかで、ウェーバーの「神々の闘争」について伺った際に、「それぞれの主張や考えの根幹には、人間や社会をどう見るかという価値があり、それは最終的に、学問的な探究を通じた果てに、最後に自分が出てくるものだ」というお話があった。緻密な議論や厳密な分析を積み重ねた後でも、根本的な知見の対立があれば、それは個々人が生の根本的な価値は何か、人間や社会をどう捉えるかという問題に帰着するという。これは良書の条件の一つにも当てはまるように思う。微に入り細に入り、論の隅々まで議論や分析が尽くされた果てに、そのうえで、最後の最後に、〈わたし〉はこう思うという潔い言葉がある本を私は好む。これは結論ということではなく、結論の果てにある、〈わたし〉としての言明という意味で。本を読み了えたときに、その書き手の姿がふっと立ち現れるとでも言うべきか。――自らに固有の価値を見出す方法を獲得するために大学という磁場をいかに活用するか。本特集の論攷が読者の皆様に多くの示唆を与えてくれることを願う。（K）

一般社団法人 大学出版部協会賛助会員社名簿

【50音順】2014年 4 月 1 日現在

株式会社朝日新聞社	〒104-8011	東京都中央区築地5-3-2
亜細亜印刷株式会社	〒380-0804	長野県長野市大字三輪荒屋1154
株式会社アベル社	〒162-0825	東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408
尼崎印刷株式会社	〒661-0975	兵庫県尼崎市下坂部3-9-20
王子製紙株式会社	〒104-0061	東京都中央区銀座4-7-5
岡本出版発送株式会社	〒353-0001	埼玉県志木市上宗岡3-16-2
カクタス・コミュニケーションズ株式会社	〒100-0004	東京都千代田区大手町2-6-2 日本ビル10階
城島印刷株式会社	〒810-0012	福岡県福岡市中央区白金2-9-6
株式会社クイックス	〒102-0073	東京都千代田区九段北4-1-13 ニュー原鉄ビル5F
株式会社粂川印刷	〒112-0012	東京都文京区大塚6-9-7
港北出版印刷株式会社	〒150-0002	東京都渋谷区渋谷2-7-7
三松堂印刷株式会社	〒101-0065	東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階
三美印刷株式会社	〒116-0013	東京都荒川区西日暮里5-9-8
三立工芸株式会社	〒101-0061	東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F
三和印刷株式会社	〒381-2226	長野県長野市川中島町今井薬師堂1822-1
信濃印刷株式会社	〒102-0072	東京都千代田区飯田橋4-1-11
新日本印刷株式会社	〒162-0801	東京都新宿区山吹町342
大同印刷株式会社	〒849-0902	佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20
ダイニック株式会社	〒105-0004	東京都港区新橋6-17-19 御成門ビル
株式会社太洋社	〒501-0431	岐阜県本巣郡北方町北方148-1
株式会社竹尾	〒101-0054	東京都千代田区神田錦町3-12-6
宗教法人天然寺	〒204-0021	東京都清瀬市元町1-4-5-711
株式会社東京弘報社	〒101-0051	東京都千代田区神田神保町1-34
株式会社とうこう・あい	〒104-0061	東京都中央区銀座8-11-11
東光整版印刷株式会社	〒135-0006	東京都江東区常盤2-12-15
株式会社トーヨー企画	〒602-0923	京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7
株式会社日本経済新聞社	〒100-8066	東京都千代田区大手町1-3-7
萩原印刷株式会社	〒112-0004	東京都文京区後楽2-21-12
株式会社博報堂	〒107-6322	東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー 19F
株式会社平文社	〒170-0005	東京都豊島区南大塚2-35-7
株式会社堀内印刷所	〒335-0034	埼玉県戸田市笹目3-11-5
株式会社毎日新聞社	〒100-8051	東京都千代田区一ツ橋1-1-1
誠製本株式会社	〒174-0042	東京都板橋区東坂下1-19-5
株式会社遊文舎	〒532-0012	大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31
株式会社読売新聞東京本社	〒104-8243	東京都中央区銀座6-17-1
株式会社ライトコミュニケーション	〒101-0042	東京都千代田区神田東松下町28-5 吉元ビル4F
渡辺印刷株式会社	〒152-0031	東京都目黒区中根2-7-1

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同下さり、ご支援いただいている各社様をご紹介させていただきます。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

●広告掲載出版社一覧（掲載順）

岩波書店	〒101-8002	東京都千代田区一ツ橋2-5-5
御茶の水書房	〒113-0033	東京都文京区本郷5-30-20
吉川弘文館	〒113-0033	東京都文京区本郷7-2-8
みすず書房	〒113-0033	東京都文京区本郷5-32-21
藤原書店	〒162-0041	東京都新宿区早稲田鶴巻町523
有斐閣	〒101-0051	東京都千代田区神田神保町2-17
筑波大学出版会	〒305-8577	茨城県つくば市天王台1-1-1
東京外国語大学出版会	〒183-8534	東京都府中市朝日町3-11-1
東京学芸大学出版会	〒184-8501	東京都小金井市貫井北町4-1-1
上智大学出版	〒102-8554	東京都千代田区紀尾井町7-1

東京学芸大学出版会

国語の授業の基礎・基本

——小学校国語科内容論

国語科コアカリキュラム研究プロジェクト 編

小学校でちゃんとした国語の授業をするためにはどうしたらいいかわからない。そんな国語の苦手な人が何を教えればいいか、そのために自分は何を知り、何を考えなければならないか。国語の本質をわかりやすく解説します。

B5 判　232 頁　1600 円＋税

小学校教師に何が必要か

——コンピテンシーをデータから考える

岩田康之・別惣淳二・諏訪英広 編 A5 判 168 頁 1800 円＋税

教職課程学生・初任教員・小学校長たち約 7,000 名のアンケートとインタビューを基にそのコンピテンシーのあり方を解析。

GIP

[TEL] 042-329-7797　[FAX] 042-329-7798
[HP] http://www.u-gakugei.ac.jp~upress

筑波大学出版会
— 筑波大学の知の発信 —
茨城県つくば市天王台 1-1-1 http://www.press.tsukuba.ac.jp/

感性認知脳科学への招待

筑波大学感性認知脳科学研究プロジェクト／編
A５判並製／ 214 頁／本体価格 2,800 円＋税
ISBN978-4-904074-28-2 C1011

筑波大学新聞で読む 筑波大学の40年

福原 直樹・伊藤 純郎／編著
A４判変型並製／ 230 頁／本体価格 1,800 円＋税
ISBN978-4-904074-29-9 C0036

Climate System Study

-Global monsoon perspective-

by Hiroaki UEDA
A5 版変型上製／ 228 頁／ 3,500 円＋税
ISBN978-904074-31-2 C3044

お求めは、全国の書店または
丸善出版株式会社へ。
TEL.03-3512-3256　FAX.03-3512-3270
http://pub.maruzen.co.jp/

キリール文字の誕生

スラヴ文化の礎を築いた人たち

原　求作【著】　本体2,500円＋税

「キリール文字」を考察したキリール・メフォージイ兄弟。彼らの波乱に満ちた生涯をヨーロッパ史の中に紡ぐ。

日本に住む 多文化の子どもと教育

ことばと文化のはざまで生きる

宮崎幸江【編】　本体2,000円＋税

複数の言語と文化に接触する「多文化の子ども」。彼らのことば、文化、アイデンティティに焦点をあて、多文化共生と教育について多角的に考察する。

〈発行〉Sophia University Press 上智大学出版
http://www.sophia.ac.jp
〈発売・注文〉〒136-8575東京都江東区新木場1-18-11
ぎょうせい TEL：0120-953-431　FAX：0120-953-495
http://gyosei.jp

【最新刊】

画像史料論

世界史の読み方

吉田ゆり子 八尾師誠 千葉敏之 編

古今東西の画像を、歴史研究・地域研究の史料として扱うための方法と意義を論じる、本邦初の画期的な史料論！ 多彩な史料に向き合うことを通して世界と歴史の実相に迫る。カラー画像多数収載。

A５判 並製 三二六頁 本体二八〇〇円＋税

東京外国語大学出版会
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
TEL 042-330-5559 http://www.tufs.ac.jp/blog/tufspub/

一般社団法人
大学出版部協会
加盟出版部一覧

NESE
ERSITY
SSES

98
4·4
ING

大学出版98号（2014年春）
2014年4月1日発行
頒価100円（〒共）

発行所：
一般社団法人大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北
1丁目14番13号
メゾン萬六403号室

TEL: 03-3511-2091
E-MAIL: mail@ajup-net.com
URL: http://www.ajup-net.com/
—
使用書体：
TB明朝, M
LTC Garamont, Display, Text
使用紙：
紀州の色上質 特厚口 レモン
—
表紙デザイン：
白井敬尚形成事務所

北海道大学出版会
〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
北海道大学構内
TEL: 011-747-2308 FAX: 011-736-8605

弘前大学出版会
〒036-8560 弘前市文京町1
弘前大学附属図書館内
TEL: 0172-39-3168 FAX: 0172-39-3171

東北大学出版会
〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学構内
TEL: 022-214-2777 FAX: 022-214-2778

流通経済大学出版会
〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL: 0297-60-1167 FAX: 0297-60-1165

聖学院大学出版会
〒362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL: 048-725-9801 FAX: 048-725-0324

聖徳大学出版会
〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL: 047-365-1111 FAX: 047-363-1401

麗澤大学出版会
〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL: 04-7173-3320 FAX: 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会
〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL: 03-3451-3168 FAX: 03-3451-3124

産業能率大学出版部
〒100-0005 千代田区丸の内1-7-12
サピアタワー9階
TEL: 03-6266-2400 FAX: 03-3211-1400

専修大学出版局
〒101-0051 千代田区神田神保町3-8
TEL: 03-3263-4230 FAX: 03-3263-4288

大正大学出版会
〒170-8470 豊島区西巣鴨3-20-1
TEL: 03-3918-7311 FAX: 03-5394-3038

玉川大学出版部
〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL: 042-739-8935 FAX: 042-739-8940

中央大学出版部
〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL: 042-674-2351 FAX: 042-674-2354

東京大学出版会
〒153-0041 目黒区駒場4-5-29
TEL: 03-6407-1069 FAX: 03-6407-1991

東京電機大学出版局
〒101-0047 千代田区内神田1-14-8
TEL: 03-5280-3433 FAX: 03-5280-3563

東京農業大学出版会
〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1
TEL: 03-5477-2666 FAX: 03-5477-2747

法政大学出版局
〒102-0073 千代田区九段北3-2-3
法政大学九段校舎1F
TEL: 03-5214-5540 FAX: 03-5214-5542

武蔵野大学出版会
〒202-8585 西東京市新町1-1-20
武蔵野大学構内
TEL: 042-468-3003 FAX: 042-468-3004

武蔵野美術大学出版局
〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL: 0422-23-0810 FAX: 0422-22-8309

明星大学出版部
〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL: 042-591-9979 FAX: 042-593-0192

関東学院大学出版会
〒236-8501 横浜市金沢区 六浦東1-50-1
TEL: 045-786-5906 FAX: 045-786-2932

東海大学出版会
〒257-0003 秦野市南矢名3-10-35
東海大学同窓会館3階
TEL: 0463-79-3921 FAX: 0463-69-5087

名古屋大学出版会
〒464-0814 名古屋市千種区不老町1
名古屋大学構内
TEL: 052-781-5027 FAX: 052-781-0697

三重大学出版会
〒514-8507 津市江戸橋2-174
三重大学附属病院5階
TEL: 059-232-1356 FAX: 059-232-1356

京都大学学術出版会
〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69
京都大学吉田南構内
TEL: 075-761-6182 FAX: 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部
〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL: 072-941-9129 FAX: 072-941-9979

大阪大学出版会
〒565-0871 吹田市山田丘2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL: 06-6877-1614 FAX: 06-6877-1617

関西大学出版部
〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL: 06-6368-0238 FAX: 06-6389-5162

関西学院大学出版会
〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL: 0798-53-7002 FAX: 0798-53-9592

広島大学出版会
〒739-8512 東広島市鏡山1-2-2
TEL: 082-424-6226 FAX: 082-424-6211

九州大学出版会
〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146
九州大学構内
TEL: 092-641-0515 FAX: 092-641-0172